

- - - b l u e - - -

ありがたくもない通知表を受け取った。明日から夏休みだ。学生達の去った校舎は一仕事を終え、溜息でもつくように静けさに満ちていた。

僕はひとり、三階の物理室の窓からぼんやり外を眺めていた。ここは普段我ら帰宅部、もとい無線部の部室として使っている教室だ。僕の名は小林雅俊、公立高校に通う三年生。来年は受験だというのに緊張感のかけらもない学生窓際族。

「どうしよっかな」

しかし真剣になんとかしたいと思っている訳じゃなかった。もうそんな段階はとうに過ぎ、チベットの僧侶のように、宇宙の成り立ちを思い描くような理解不可能な領域に脳みそを放り込んでいた。簡単に言えば残り物の納豆にラップをし、冷蔵庫の奥に置き忘れたまま1年と2ヶ月経ってしまったような状態だった。だから『どうしよっかな』という気の抜けた言葉しか出てこない。そんなふうだから時間はあっという間に過ぎていった。

「はあ」

幾つ目かの溜息が夏の風に運び去られていった時、中庭の楠の向こうのプールに人影が現れた。姫の登場だ。彼女の名は大間百合子、同じ高校の三年生だ。常に県内模試で上位にランクされる秀才であり、インターハイの水泳選手に何度も選ばれる実力の持ち主、加えてルックスも申し分ない。例えるなら宝塚の男役、しかし大地真央のような威圧的な顔じゃなく、天海祐希似の涼しげな目元のすっきりとした美人だ。

これほど才能と美貌を持ち合わせた人間が存在しているのかと、神様に不満を言いたくなるのは僕だけじゃなはずだ。でも大間と廊下ですれ違う瞬間、そんな嫉妬は泡のように消え、無理してこの進学校に入学して良かったと思ってしまう。とにかく恋愛感情を抱くなど恐れ多いほどに、近くて遠い存在が大間なのだ。だから僕はこうやって日向ぼっこをする駄目犬のようにサッシに首を引っかけ、大間に見入るしかなかった。突然、溜息混じりの声が後ろ頭にふりかかった。

「小林・・・、聞いたぞ数学の他に古文も赤点なんだってな、どうするつもりだ」

振り返ると遠藤先生がいた。彼は僕の担任であり、無線部の顧問だ。先生は実験機材の入った長持を抱えたままこちらを睨みつけていた。

僕は苦笑いをしながら頭をかいた。先生は呆れた顔で、長持を緑色の大きな教卓の上に置くと中に入っていた書類を僕に押しつけた。

「上田先生からだ、ほら」

それが何か、見なくても判っている。再テスト用の自習テキストだ。上田という数学担当の教師はいつもこうなのだ。長年の教師生活で作りためた自作テキストを、事ある毎に生徒に配る、彼はそれで授業をしたつもりになっている。しかし内容たるや少しもかみ砕かれておらず、上田の性格そのままの細か過ぎる文字が並び、読む気を失せさせるのだ。

「追試は10日後、先生たちは毎日学校にきてるから解らない所があれば聞きに来るんだぞ、上田先生がいなければ教えてやるから」

そういうと遠藤先生は横を通り過ぎ、僕が見ていた窓から同じように外を見た。

「なんだ、またおまえ大間を見ていたのか」

「またって...先生」

「そろそろ告白でもしないか？」

「そんなんじゃないですよ」

「じゃあなんなんだ、一年生の頃から夏になると、柳の幽霊みたいにずっとここから大間を見てたじゃないか、流石に三年も続くと夏の風物詩みたいにみえるぞ」

先生は長持の中の実験道具を教室の後ろにある棚に片づけながら言った。

「そういえば大間も、まだ進路を決めてないみたいだぞ」

「嘘、この時期に」

「顧問の先生も困ってたなあ、三年生でもう部活もないのに一人ああやって泳いでるって。まあおまえと違ってどこの大学でも行ける自信があるんだろうな」

「へえ～」

素直に感心する僕を見て遠藤先生は肩を落とした。

「おまえはいいよなあ、予備校一直線なものな」

先生の言う通り、今の学力では三流大学も狭き門だった。恐らく、いや半分以上の確率で予備校に入れる自信があった。しかしその為には無事高校を卒業しなくてはならない、今はそれが最大の目標になっていた。

「とにかく、古文の再テストも同じ日にあるんだ、小学生の夏休みみたいにダラーと寝てないで勉強するんだぞ、いいな！！」

遠藤先生は僕の尻を黒板用のでかいコンパスで叩いた。鞭を入れられた馬ならヒヒーンと嘶くのだろうが、2、3歩前に歩み出た程度で『ハイ』とうなずいて見せた。

「もうすぐ教室閉めるぞ、早く帰れ」

先生は又大きなため息をつき、物理教室脇の補助室に入っていった。

「ええ、もう少しいちゃだめですか」

補助室に顔を向け、わざとで甘えてみた。半開きになったドアの隙間から、先生が白衣を脱ぐのが見えた。ワイシャツをめくり弛んだ下腹があらわになった。

「忙しいんだ、おまえのお楽しみにつき合ってもらえるか」

バッグからシャープペンシルのような物を取り出し、先端を腹に押し当てた。これから昼食をとるのだろう、事前にインスリンを打ち血糖値を下げているのだ。先生は酒好きが災いし昨年の秋、糖尿病で入院した。それからはインスリンを打ってからでない食事もできない。もちろん禁酒なのだが、こっそり飲んでいるようだ。命まで縮めても飲みたい酒とはそんなに美味しいものなのだろうか先生の白い腹を見て思った。

「なにしてる、早く帰れ」

僕の視線に気づいた先生は、ズボンにYシャツを突っ込みながらこちらを睨んだ。仕方なく鞆を右手に抱え、ドアの隙間から左手を振って教室をはなれた。さあこれからどうしよう？けれど、やはり答えなどなかった。

物理教室を出た後、高校の近くのコンビニのベンチでコーラを飲んでた。正確に言うとコンビニじゃなかった。雑貨屋だった店が大手パン屋の指導でそれらしく見えるように改造されたナンチャッテコンビニだ。学生はこの店を『付け屋』と呼び、その名の通り金の

無い時は付けにしてパンを買っていた。喉を流れ落ちる炭酸の液体、刺すような泡にもだえながら顔をあげた。セルリアンブルーの空が真夏の太陽を黄門様の印籠のように掲げていた。眩しすぎて腹立たしいほどだ。飲み終えたら今度こそ帰ろう、そう思った時、陽炎の立ち上る校舎脇のアスファルトを、大間百合子がこちらに向かって歩いてくるのが見えた。僕はペットボトルの口を加えたまま固まった。大間は右手にカバン、左の二の腕にオレンジ色のスポーツバッグを抱え、店の自動ドアの前に立った。僕は息を殺し目を伏せ前屈みになった。大間が店内に入っていった。忘れていた呼吸を思い出した。いったい何を買いにきたのだろう。しかし振り返って中を覗くわけにもいかない。自動ドアが開く音に耳を澄ませた。

「ありがとうございました」

店番のおばちゃんの声とともに大間が出てきた。そして事もあろうに僕の隣に腰を下ろした。大間はレジ袋に手を突っ込み中から薄っぺらい箱を取りだした。エスキモーのピノだった。

「食べない？」

赤と青のプラスチックの爪楊枝が突き刺さったピノが目の前に差し出された。一度も話もしたことのない彼女から突然声をかけられリアクションに困った。

「いや、今これ飲んでるから」

コーラのボトルを見せ、ぎこちなく笑ってみせた。大間はずつらなように、赤いプラスチック爪楊枝が刺さったピノを口にくわえた。昼下がりの午後、照りつける太陽は店先の日よけの傘を作るクッキリとした影で僕のつま先と道路を分けていた。時折、目の前を大きなトラックが横切り、そこからはき出される排気ガスの熱風が足にからみつく。僕らは蝉の鳴き声に包まれながら沈黙した。コーラの残りが後少しになった時、大間はもう一度話しかけてきた。

「ねえ、さっき三階の窓から見てたでしょ」

質問とも非難とも区別の付かない言葉が僕の前に放り投げられた。順調に喉を流れていた液体が急激にその進路方向を気道へ変えた。むせる、はき出す、呻る。返事を返す余裕もない、咳を繰り返し何とか息を整えようと必死になった。そんな僕をよそに大間は顔色一つ変えず空を見上げた。

「いいのよ、ずっと前から知ってたし」

ようやく声が出せるようになった頃、大間は更なる攻撃を仕掛けてきた。

「私のこと好きなの？」

大間は両足をぶらつかせて見せた。僕はコーラを持った右手を激しく振った。

「ならなんでいつも見てるの」

「ごめん」

「なんで謝るの」

透明人間のつもりでいた自分が情けなかった。そっと横を見ると大間は涼しそうな目元で微笑んでいた。綺麗だった。ほのかに赤い唇、それを見た途端思い描いていた白黒デッサンが鮮やかに色付いた。ペットボトルについた水滴が落ちて、学生ズボンに染みていくのも気づかず、僕は恥ずかしさも忘れ見とれてしまった。

「見られるの嫌いじゃないよ」

「あ、ごめん」

「いいのよ、他の男子もそうだし。それに大抵そのうち興味なくして離れていくし」  
それはある面正しかつたが、ある面間違っていた。というのも我が校精鋭のイケメン達が大間を口説き落とそうと戦いを挑んでいたのは確かだ。しかし悉く惨敗し、敗戦情報が校内に知れ渡り、プライドを打ち砕かれた男達は、手近な女で手を打つしかなくなってしまう。それが嫌で最近では敵前逃亡するものが多くなっていたというのが実際の所だった。

「ねえ、どこか行かない」

耳を疑った。そしてそれはすぐに諦めに変わった。本心じゃない、おちょくられている。まるで猫が目の前のネズミを軽くネコパンチするようなものだと思った。僕は少々開き加減だった口を閉じ無視した。

「なんか予定でもあるの？」

「勉強しないと」

「あら真面目なのね、でも終業式の日くらいいいじゃない？」

「君はいいよ、どこの大学でも行けるから」

彼女はさらりと言って返した。

「大学はいかないわ」

大間は最後のピノを頬張ると口の中でそれをゆっくりと回した。彼女の言葉が信じられなかった。東大でも行ける頭脳を持ち、学校からも期待されている彼女が受験しないはずはない。

「嘘だろ」

「え？何であなたに嘘つかなくちゃならないの」

髪を耳に掛けなおし、くすくすと笑った。

「じゃあ何故行かないんだ、その方が不思議さ、いや不自然だよ」

「勉強できたら大学へ行くのが自然？」

大間はスカートに落ちたゴミを摘んでアイスが入っていた空箱にそれを入れた。

「もったいないよ、君なら何にだってなれるのに」

そのとき素直にそう思った。しかし大間は首を振った。

「なりたいものなんて無いわ」

「つまんなくない？」

「なんでよ、いいじゃない」

大間は頬をふくらませて見せた。白い肌がまあるく飛び出し、それがまた可愛らしく見えた。初めて見るおどけた表情、その時ようやく僕の緊張がゆるんだ。遠い所にいた大間が少し近くに感じた。向かいの民家の松の木に止まっていた蝉がフルパワーで鳴き始めた。僕は急に大胆な気持ちになった。

「ねえ、本当に僕とどこかいきたい？」

「なにか怪しい聞き方ね、もしかしてなにか別の事考えてる？」

大間は首をかしげた、僕は思わせぶりの口ぶりで彼女を誘った。

「違うって、おもしろいものを見せてあげようかなってさ」

「なに？」

「小さい頃からずっと秘密にしておいた場所さ」

「何かあるの？」

「ある」

「怖くない？」

「ん～ん」

その時の僕は彼女の喜ぶ顔が見たくて仕方なくなっていた。

「私が見ていいの？」

答えるよりも前に大間の手をつかんだ。彼女は僕の手を握り返し頷いた。今思えばただの気まぐれだった。しかし、気まぐれだからこそ素直な自分を見せられたのかもしれない。夏のある日、そこにいたのは僕と彼女だけ、ただそれだけの事だったのかもしれない。

「ねえ、まだ？」

大間はバックを胸に抱え自転車の後ろをついてきた。

「もう少しさ」

僕らは角田山の本道から逸れ、細い山道を登っていた。角田山は高校の西側にある標高481メートルの山だ。僕の家は麓から少しあがった場所にあり、この辺は子供の頃からいつも遊び回っていた場所。生い茂る木々の隙間からは稲のジュータンを敷き詰めた田圃の真ん中に僕らの高校がよく見えた。

「でも、ほんと学校近いのね」

「距離だけはね、でも僕の頭じゃ今でも遙かに遠い所にある学校さ」

「どういうこと？」

「東大の近くに住んでる人が東大に行ける訳じゃないってことさ」

「でも受かったんでしょ」

「それが不思議なんだ」

「他人事みたいな言い方」

「そうだね」

「そうだねって、もう・・・、ねえまだ？」

大間は首筋の汗をハンカチで拭いながら肩で息をしていた。途中自転車を捨て、僕は彼女の手を引き、道無き道に分け入った。勢いよくのびた雑草が壁のように行く手を阻んだ。

「ちょっと、どこまでいくのよ」

少し切れかけかな？まずいな～と思ったその時、目印の木を見つけた。

「この下さ」

僕は小道から下を見下ろした。今まで登ってきた山道の傾斜とは比べものにならぬ程きつい斜面、大間は隣にやってきて僕の腕を掴み下をのぞき込んだ。

「もしかしてここを降りるの？」

「大丈夫」

近くの木の根本の草を掻き分け、工事現場で使うような黄色と黒のビニールの紐綱を取りだした。そしてそれを木に結びつけ斜面の下に放り投げた。

「捕まって降りて」

僕は綱を掴みロッククライマーのように斜面に向かって降り始めた。彼女は動こうとしな

い。それどころかしゃがみ込んで首を振った。大間の生足が目の前に近づいた。ともすると下着が見えそうだった。でも視線をずらすとかえって嫌らしくなってしまうそうで出来なかった。

「怖いわ」

「大丈夫だって、さあ」

左手で綱を握ったまま右手を大間に伸ばした。それでも彼女はためらった。

「ならこうしよう」

僕はもう一度大間の所まで戻った。そして彼女の背中を抱くようにして綱を握り、彼女を包み込む籠になって斜面を降りた。

「重いわよ」

「まかせとけて」

自分でも驚くほど大胆になっていた。大間は僕の胸に体重を乗せた。甘い香りが鼻先をくすぐった。夢の中の出来事のような気もした。大切なものを守るんだと僕は男になった。右足、左足、右足、左足、号令をかけながらゆっくりと斜面を降りていく。枝に止まっていた野鳥が訝しげにこちらをのぞき込んだ。心臓が爆発しそうなほど高鳴った。大間にこの音が聞こえてはいないだろうか？気になって彼女を見ると怖いのか目をつぶっていた。

「まだ？」

「いいよ目を開けて」

斜面の途中の小さな平地に降り立った。大間は綱を握ったままゆっくりと目を開けた。そこには人ひとりがようやくしゃがんで入れそうな横穴が口を開けていた。

「ここ？」

「そう、僕しか知らない洞窟さ」

「コウモリとか虫とかいない？」

大間は怪訝そうに中を覗いた。

「コウモリはいないけどムカデくらいは」

言い終わらないうちに大間は僕の背中を穴の中へ押しやった。

「まってよ、準備があるんだから」

僕はポケットからライターを取り出した。何でライターを持っているの？という目で彼女はこっちを見た。それはすなわちタバコを吸う人？て聞かれている事と同じだった。

「吸わないよ、これは部室でお湯を沸かすとき使うためのものさ、ホントだって」

そういうとライターの火を暗闇にかざした。ぼんやりと穴の内壁を明かりがなめた。頭を低くし少しずつ中へと入っていった。奥の冷気が足下を流れていく、体を横にし大間を手招きした。意を決めたのか彼女はポケットから輪ゴムを取りだし髪を束ねた。

「ちゃんとみててよ、いい？」

大間は膝をかがめウサギ跳びのように中へと入ってきた。そして近くまで来ると言った。

「これじゃまるでインディージョーンズじゃない」

不安そうな彼女の手を引いてさらに奥へと向かった。徐々に穴の上部が高くなり、既に外の光も届かない。僕は大間の肩をたたき、彼女の視線の先にライターの炎をかざした。すると目の前に神秘的な光景が広がった。それは山のから染み出した水で出来た鏡のような池だった。炎が水面に僕と大間の顔を映し出した。彼女は目を瞬かせ見入っていた。僕は

ハンカチを取りだし平らそうな岩に敷き、大間を座らせた。

「綺麗ね」

僕は膝を抱え彼女の脇にしゃがみ込んだ。

「驚くのはまだ早いよ」

彼女の言葉を制止しライターの火を消した。

「なによ... 怖いわ」

「大丈夫、心配ないから、でも少しだけ静かに」

僕は池に手を入れパシャパシャと水を叩いた。そして池底に向かって話しかけた。

「ブルー、おいでー、僕だよ、ブルー」

すると真っ暗だった池の底から碧い点の光が浮かび上がった。光はゆらゆらと水の中を揺れながらゆっくりと水面に向かって上ってきた。大間は僕の腕を強く握り身体を固くした。

「ブルー、ここだよ」

小さな点だった碧い光は次第に大きくなり、野球の球ほどの大きさになった。そして指先にそーと近寄りピタリと止まった。僕は大間の方を向き彼を紹介した。

「ブルーだよ、大間」

恐る恐る彼女はその光を覗き込んだ。碧光の正体は小魚だった。全身の鱗から碧い光を放ちまるで人魂のように揺らめいていた。

「ネオンテトラ？」

「熱帯魚じゃないよ、それにネオンテトラは光らないでしょ？」

「じゃあなにこの魚、なんでこんな所にいるの？」

「なんでだろうね、でもブルーは僕の小さい頃からここに住んでるんだ」

僕もブルーがなんなのかよく知らなかった。

「じゃあ誰かが飼えなくなってここに捨てたとか」

「さあ、どうなんだろうね、でもここには誰も来ないよ、言っただろ秘密の場所だって」

両手で水ごとブルーをすくい上げ、大間の目の前に差し出して見せた。彼女の眉間は青白く照らされた。ブルーは彼女の方を向くと尾びれをぶるぶると振った。その様子はとても愛らしく喜んでいるように見えた。緊張していた大間の表情がゆるんだ。

「可愛い、でも不思議、なんで光るんだろ、突然変異の新種かな」

僕はブルーを池の中に戻した。勢いよく水中を泳ぎ回るブルー、まるで久しぶりに友達かやってきて嬉しくてたまらないというようだ。

「かもね」

「生物の先生に調べてもらったら？大発見かもよ」

「どうでもいいよ、そんなこと、ブルーはそんなこと望んでない」

ブルーと初めて出会ったときのことを彼女に話して聞かせた。それは中学の入学を目前に控えた12歳の春だった。その頃まだ元気だった爺さんと山菜取りに山へ登ったときだ。空は澄み渡り、日の光を受けた山肌は朝露できらきりと光っていた。僕は爺さんの止めるのも聞かずタラノ芽の木を探しに奥にわけいった。ゼンマイなど見向きもしなかった。タラノ芽を天ぷらにして腹いっぱい食べたい、ただそれだけだった。そのうち山道からはずれ、獣道に迷いこんだ。気が付くと爺さんの声も聞こえなくなっていった。頭上を見上げると木が鬱そうと茂っていた。さっきまで見えていた集落も見えない。どっちから歩いて

きたのかさえも解らない。急に怖くなり大声を出して斜面を下りはじめた。けれど爺さんの声は返ってこない。唇をかみ、こぶしを握った。いつのまにかタラノ芽を入れた袋はどこかへ落としていた。突然、大粒の雨が降ってきた。春といってもまだ早い時期、雨に濡れた体からは急激に体温が失われていった。ぶるぶると震えながら泣き出した。濡れた下草で足が取られ思うように降りる事さえできない、もどかしくて走り出した。そして僕は見事に切り株につまづいた。頭から激しく回転し斜面を転がった。一瞬だったような長かったような、どちらにしても僕は意識を失った。

目を覚ますと星が見えた。辺りはすっかり闇に包まれ野鳥の不気味な鳴き声が山に響いていた。不安と空腹で声も出ない。立ち上がろうとすると右足首に激痛が走った。折れている、歩けないと思った。死の恐怖を感じた。その時だ、数メートル先に碧白い光が浮かび上がった。火の玉？幽霊が僕を殺しに来たと後ずさりした。けれど碧光りはその場からまったく動かなかった。それはまるで僕を怖がらせないようにしているように見えた。しばらくして好奇心が恐怖心に勝った。足の痛みも忘れ、犬のようにヒザで這いながら碧光りのする方へ寄っていた。もうすぐたどり着く、そう思った時、ふっと碧光りが消えた。辺りを見回すと月明かりに照らされた斜面に、小さな横穴が口を開けていた。穴の奥である碧光りがまるで息をするように光の強さをゆっくりと変えていた。僕は碧光りを追いかけて穴の中へ、そしてブルーに出会った。

「まって、おかしいじゃない、碧光を見たのはこの洞窟の入り口なんででしょ」

「そうだよ」

「ならこの魚は宙を飛んだってことになるわ」

「そうだよ」

僕はブルーと見つめ合った。

「トビウオでもあるまいし、こんな小さな魚にそんな事ができるわけじゃない。私には幽霊の火の玉の方がまだ真実みがあるように思えるんだけど？」

大間は信じようとはしなかった。僕は言い返さなかった。

「ブルー」

ブルーの頭を優しく撫で水の中に戻し、心の中で『飛んで』と語りかけた。するとブルーはぶるぶると身体を震わせた。そして更に強い光を放つと水の中からふわりと浮き上がった。それはあたかも僕たちのいる場所が無重力の宇宙になったような光景だった。大間は大きく目を見開いた。

「嘘・・・」

ブルーは小さな月のように洞窟を照らし、蛍のようにやわらかく闇を舞った。大間は口を押さえた一言も発せない。

「僕だって信じられなかったさ」

あの時の驚きは今も忘れない。寒さも足の痛みも忘れ、洞窟の夜を泳ぐブルーに見とれ、いつの間にかそのまま眠ってしまった。翌朝目を覚ますとブルーの姿はどこにもなく、不思議なことに足の痛みも消えていた。夢を見たのだと思い洞窟を出た。斜面にはうっすらと雪が降り積もっていた。刺すような寒さに身を震わせながら山を下った。そして消防団の捜索隊に発見保護された。後から聞いて知った話だが山に迷ったその夜、季節はずれの寒波が押し寄せた。そんななかの僕の生還は奇跡だと皆喜んだ。ブルーのことは誰にも話

さなかった。これといった理由があったわけじゃない、敢えて言うなら話して聞かせるには真実みにかけていたし、曖昧な記憶しかなかったからだ。

「それから暫くした春祭りの日、学校から帰った土曜の午後、親に友達と遊びに行つてくると嘘をついて家を出たんだ。この目でもう一度あの日見た空飛ぶ光る魚を確かめたくてね」

「また遭難しちゃうんじゃないかって思わなかったの？」

「少しはね、でも前もって地図で確かめておいたし、それに何かあってもまたブルーが助けに来てくれるって心のどこかで思っていたのかな」

地図を頼りに山を登った。そしてこの前転がり落ちた獣道にたどり着いた。下を見下ろしても何も見えない、斜面を慎重に下りながら横穴を探した。けれどいくら探してもそれらしきものは見あたらない、やはり夢だったのかと諦めかけたその時、生い茂るソテツの葉の隙間に碧い光が見えた。ソテツを掻き分けると横穴があり、奥の方で小さな月がゆらゆらと揺らめいていた。

「正直、2度目の方が驚いたよ」

「なぜ今まで誰にも言わなかったの？光る魚っていうだけで凄いの、宙に浮いて自由に泳ぎ回る魚なんて大発見じゃない」

「君は自分の親友をさらし者にして有名になりたい？」

「でも魚でしょ」

といいながら大間のブルーを見る目は魚をみる目じゃなかった。彼女が必死に冷静な判断をしようとしているのを感じた。そんないっぱいいっぱいの大間をよそにブルーは尾びれを可愛らしくふった。

「ブルーはもう一度僕を救ってくれたのさ」

「もう一度って？」

僕は中学でいじめにあっていた。それもチクチクと刺すような陰湿なものだった。必然的に休みがちになった。親には学校へいくと嘘をつき、よくブルーの所にやってきては本を読んで一日を過ごした。ブルーが照らしてくれるから明かりなんていらなかった。そんなある日、上級生に呼び出された。なにか面白くないことあったのか、かつ上げをされた後、気に入らないと酷く殴られた。そんな顔を親に見せる訳にもいかないから、またブルーの所で泣いていた。死にたい、もう死にたいと叫んでいた。するとブルーが僕の頬を突いた。顔を上げるとブルーがじっとこっちを見て、口をぱくぱくと何かいいたそうにしていた。僕には解った。『だめだよ、だめだよ』ってそう言いたいのだと思ったが、もうなにもかも嫌だと、家の納屋から持ちだした農薬のビンのふたを開けた。その時、ブルーが洞窟の壁に体中の光を集めてある光景を映し出した。

「嘘、そんな事も出来るの？」

大間は僕の方に体を向けた。

「海の見えるベランダで、髪の毛の長い女性が女の子を膝に乗せて話をしているんだ。たぶん5、6歳くらいなのかな、女の子はグーフィーのぬいぐるみの両耳を右手と左手にもってグルグル回しててさ、母親がそれをみて可哀想でしょって娘をさとしてるんだ」

「どうということ、話が見えないよ」

鼻をかきながら話を続けた。

「その女性、僕の奥さんだと思うんだ」

大間は怪訝そうな目で僕を見た。

「ホントだって、母親が女の子に写真を見せてたんだ。そこには産着につつまれ猿みたいな顔の赤ん坊をうれしそうに抱きかかえた僕が写っていた。母親は写真の僕を指さし泣き真似をしたんだ。言葉は聞こえなくても彼女の口の動きと手振りは何を言っているのかわかったんだ『お父さんエンエンって泣いたのよ』ってね」

大間は吹き出して笑った。

「笑うならやめるよ」

「ごめん、続けて」

大間は口を手でおおった。

「これが未来の家族？ってブルーに聞いたんだ」

「そうしたら？」

「僕の周りを嬉しそうにぐるぐると回ったんだ」

「信じたの？」

「君には間抜けにしかみえないんだろうね。でもその時の僕は勇気づけられたんだ、こうなれるならがんばってみようかなってね」

あまりに真剣に話すものだから大間もそれ以上いわなくなった。そして彼女は宙を漂うブルーをじっと目で追っていた。

「努力しだしたのはそれからさ、いじめは続いていんだけど学校には欠かさずいくようになった。次第に勉強も解るようになり、友達も何人かできた。そしたらいつの間にかイジメは消えていたよ」

「そう、それで高校へも合格したってことか... それを聞くと小林にとってのブルーがどんな存在かうなづけるわね」

大間は驚きという鎖から解放され、今の状況を冷静に整理し始めたようだった。そして一通り消化したのか、まるで世間話でもするように何気なく聞いてきた。

「ねえ、その時に見えた女の子ってどんな人だった？綺麗な人？」

照れながら答えた。

「うる覚えなんだけど... 右の頬にえくぼが出来るんだ、ストレートの髪を肩の後ろに流す仕草がなんかグッときてさ」

「えくぼか、あれ可愛く見えるわよね、へえ、でもそういうのが趣味なんだ、じゃあ私なんかえくぼもないしタイプじゃないってことよね」

確かに涼しげな目元の大間とは違って、華やかな感じのする女性という記憶が残っていた。しかしかといって大間がタイプじゃないという訳でなく、でもそんな事を言うとじゃあ誰でもいいのとつっこまれそうで敢えて言わないでおいた。

「その女の子、小林に似ていた？」

「アンパンマンみたいにぷくぷくしててよくわからなかったよ」

「そう、でもいいわね、側にいてくれる人がいて」

大間は握っていた僕の腕を離した。

「そんなふうにするなよ、ずーと先のことで僕の思いこみかもしれないし」

「でも、信じてるんでしょ？」

それでも大間の顔のくもりは晴れなかった。

「そうだけど、ねえ、どうしたの？何か悪い事を言った？」

首を振りうつむく大間の顔を僕とブルーはそーとのぞき込んだ。

「私の側には誰もいない」

「沢山友達いるだろ。それに親だって」

「表面上仲良くしてる人は沢山いても私を理解してくれる人はいないわ、それに親といっ  
ても自分勝手な母親が一人いるだけ、家じゃいつも一人なのよ」

そう言えば大間の父親は彼女が小さいときに自動車事故で亡くなったとクラスメートが話  
しているのを聞いた事があった。

「でも君の母さん、予備校の先生なんだろ？生徒にも人気のある綺麗な人だって浪人して  
いる先輩が話してたよ」

「確かに頭はよくて美人ね、でも男にだらしのない人、家庭なんて関係ないの、女でいら  
れたらそれでいいそんな人」

大間は水面を軽くはたき、ブルーを池に戻るよう促がした。ブルーは躊躇うこともなく水  
にその身を浸した。

「いい子ね...ブルー」

褒められたのがよほど嬉しいのだろう、ブルーは池の中をグルグルと回って見せた。目を  
細める大間、喜ぶブルー、あっという間にうち解けてしまったようで少し悔しかった。

「でも、うちの母親みたいにガミガミ言うだけのおばさんよりいいだろ」

急に大間の眉間に皺が寄った。そんな辛く切なそうな表情は今まで一度も見た事がなかつ  
た。

「無害ならね...でもあの人は毒の固まり、あの人は私の父さんを殺したの」

憎しみのこもった声は今まで感じなかった洞窟の湿気を気づかせた。そして大間はぼつり  
ぼつりと話し始めた。彼女が小学校の4年生の夏休みのある日、家族でデパートに買い物  
に行く約束になっていたらしい。しかし朝起きると、テーブルにメモが置いてあった。『仕  
事で呼び出されたので行けなくなりました。必要な物はメモしてあります。二人で買い物  
に行ってきて下さい』と書かれていた。仕方なく大間は父親と二人で買い物に行った。か  
えって彼女は父親を独り占めに出来て嬉しかったようだ。とにかく思いっきり甘えたデー  
トをし、上機嫌の帰り道、家の近くの公園で父娘は信じられない光景を見た。母親と若い  
学生が車の中で抱き合っていた。父親は無言で大間の手を引きその場を立ち去った。それ  
から家の中から家族の笑い声はなくなった。毎日父親と母親の怒鳴りあう声がきこえた。  
大間は父が死ぬ前の晩、母親が父親に言った言葉を今でもはっきりと覚えていると言った。

「母は髪をかき上げながら面倒くさそうに『もう貴方といってもつまらないの』って吐き捨  
てたの」

父親は女性をグイグイ引っ張っていくタイプの男性ではなかったらしい。しかし父親が母  
親を心から愛していたのを彼女も知っていた。父親は自分も仕事で疲れているのに母親を  
気遣い、家事の手伝いをよくした。言葉少ない人だったけれど小さな思いやりを母親は沢  
山感じていたはずだと大間は言った。それなのに母親は大間の大切な恋人である父親を侮  
辱し捨てた。翌日、父親は文房具屋へ買い物に行った帰り、交通事故に遭い帰らぬ人とな  
った。赤信号の横断歩道でバイクに轢かれたのだ。警察は自殺を疑った。しかし横断歩道

の真向かいで美容店を経営している女性が一部始終を店内から目撃していた。話によると父親は俯きながら黄色に点滅を始めた横断歩道に入っていったらしい。まもなく信号は赤に変わった。けれど父親はそれに気づかない。ピアノ発表会の為に美容店に来ていた少女がセットを終え、付き添っていた両親と店を出てきた。奇麗になってはしゃぐ少女の声が耳に届いたのか、歩道を渡る父親は足を止め顔をあげた。仲良さそうな家族を見つめる表情は物悲しげだったと女性は語ったという。そしてそこへバイクが突っ込んできた。

「その時、お父さんがどんな気持ちでいたかって思うと切なくて」

通夜の晩、目を真っ赤にして泣いている母親を見て大間は『貴方が殺したんだ』と思ったそうだ。それからいっさい母親とは話す事がなくなったという。一旦冷え込んだ母と娘は他人よりも遠い存在になった。母親は時たま帰ってきては金をテーブルの上に置いていくようになった。大間は母親を憎む気持ちで自分を保ちながら暮らしてきたらしい。

「これが私たち親子、どう仲がいいでしょ」

大間は僕の肩に頭を乗せた。どきどきなどしなかった。肩を貸してあげられてよかったと思った。小さな頭、長い髪が彼女の左目を覆った。大間の肩に手をかけ引き寄せた。嫌らしい気持ちではなくそうしてほしいと彼女が望んでいるように思えたからだ。

「おしえてあげようか」

大間は鼻を押し当てた。

「私ね、悪い事いっぱいしてるのよ」

「？」

「優等生って仮面かぶって、人にいえない事を続けてる」

大間の震えが肩に伝わる、泣き出しそうなのが解る。いつの間にかブルーも泳ぐのをやめ池の真ん中でじっとこちらを見ていた。

「君がかい」

「ええ、吐き出したくなるようなもう一人の自分がいるの」

力無いその言葉は僕を緊張させた。

「冗談はよせよ、せっかく君を喜ばせようと連れてきたのに」

大間の告白を聞くのが怖かった。

「そうね、ごめん... ねえ、このまま少し眠っていい？」

「うん」

大間の口を塞いだ意気地のなさが恥ずかしくて、小石を投げるような返事しか出来なかった。でも彼女は静かな目で僕を見て頷いた。

「ありがとう、それからブルーもそこにいてくれると嬉しいな」

そう言うと大間は目を閉じ、まもなくすうすうと寝息をたてた。ブルーに照らされ眠る大間の横顔はどことなく疲れて見えた。こんなに近くに憧れの女性がいるというのに悲しくなった。そして大間の言う悪い事とは何なのか気になった。けれど大間はそんな僕をよそに深い眠りに落ちていった。ブルーも少し光を弱め大間を見守った。

あれから一週間、僕たちは毎日のように洞窟にいた。遊んでいた訳じゃない、大間に追試の勉強を教えてもらっていた。僕は人間が簡単に洞窟へ来れるように草木を伐採し新しい

道を造った。彼女は喜んでくれた。

『それでこそ男の子、こういう心遣いが女性には嬉しいのよ、ありがとう』

僕と彼女とブルー二人と一匹が顔をつきあわせ、朝から夕暮れ近くまで時間も忘れ勉強した。テキストだけ配って終わる数学の上田より遙かに理解できた。異国の文章だった古文も彼女が話すとおもしろい物語に聞こえ、続きが気になり、それが興味となり意欲となった。とにかく今まで詰め込むだけの苦しい勉強が知るといふ喜びに180度変わった。

「万葉集とか読むともっと興味がわくかもしれないよ、あれは他人のラブレター読んでみたいな気にさせられるから」

そういつて大間はそらで何首か詠んでくれた。その中に今の僕にぴったりの一首があった。

#### 門部王の恋の歌一首

宇(おう)の海の潮干の潟の片思(かたもひ)に思ひやゆかむ道の長手を  
飢宇の海の潮が引いた干潟ではないが、片思いにあの子を慕いながら行くのだろうか、長い旅の道のりを。

期待など抱かず、ただ大間を思いながら自転車をこいで家路を帰る自分の姿と重なった。昔の人もそんな気持ちになったのかと知ると少し救われた気がした。

「君は何でも知ってるね、やっぱりかなわないよ」

僕が家から持ってきたナビスコオレオを頬張っていた大間は口に手を当てた。そしてある程度かみ砕いた後、咳き込みながら言った。

「大げさよ、小林はただ勉強の仕方が間違っただけでしょ、今の調子ならすぐに上にあがれるわ」

やる気を出させるための褒め言葉とはわかっていても嬉しかった。学力が上向いていくという充実感より、大間の善意になんとか応えられているという事が男としてのプライドを奮い立たせてくれていた。誰かの喜ぶ顔が見たくて勉強するなんて考えたこともなかった。そんな浮かれた僕を見て大間は笑い、そして何気なく聞いてきた。

「ねえ」

「ん？」

「小林って、勉強して何になりたいの、何かしたいことでもあるの？」

言葉に詰まり笑い顔がこわばった。

「ないよ」

「ほんと？」

黙り込む僕を見て大間は笑った。

「なんだ、あるんじゃない、ねえ教えてよ」

「いやだ」

「なんでよ、ケチ」

「君みたいな人にはわからないかもしれないけれど、そんなこと話せるほど僕は立派な人間じゃないよ」

「なによそれ、私と何が違うっていうのよ、小林だって出来ない訳じゃないでしょ」

大間は不機嫌そうに口を尖らせた。僕は何が同じなんだとかつときた。

「あるさ、さっき君が言ったろ、僕は勉強の仕方を間違ってたんだって。そうさ、君がいなければその事に気づかなかった。それだけじゃない、何をするにしたって僕はまっすぐに道を歩けない。だからいつも遠回りして疲れ果ててしまう。僕だって思うように生きたいよ。でも何をしたらって思う事の10分の1も進めない。夢を語れないなんて自分でも恥ずかしいけれど、夢がありますなんて言ったりしたら直ぐその後、多分無理だろうなって思っちゃうんだよ。だから」

「じゃあこんな勉強なんて無意味じゃない」

「違う」

小さな声でぼそりと言った。

「大間といわれた」

池の畔で僕らを照らしていたブルーが明かりを少し弱めた。

「何、子供みたいな事言ってるの、そんなことの為なら私もうこないよ」

大間を喜ばせようといった訳じゃない、本当の気持ちだ、高校生活の中でこれほど楽しくて満ち足りた日はなかった。うれしくて仕方なかったのに、彼女に無意味だと切り捨てられ悲しくなった。

「大間には馬鹿らしいと思うだろうね、でもこうやって毎日自分を前に押し出すだけで必死なんだ、怠けてる訳じゃない。万年補欠の選手が毎日訓練する辛さだってこの世にはあるんだ。夢がないんじゃない、何でも自由になる君とは違うんだ」

今にも泣きそうな目で唇をかんだ。恥ずかしい自分をさらけ出させた大間を恨んだ。彼女はそんな僕に驚き、口に手を当てた。まるで見た事もない生き物を見るような、初めてブルーを見た時以上のショックを受けているようだった。

「行きたきゃいけよ、これが僕さ、幻滅したんだろ、嫌いになればいい、というか初めから何とも思っていないか」

「ひどい、そんな言い方しなくても」

言い返そうとすると、ブルーが池を飛び出し、もうやめろと僕の顔の前でイヤイヤをした。咄嗟に手で追い払った。ブルーは水面にたたきつけられた。手を挙げた事など今まで一度もなかった。初めての事で手が震えた。大間が僕の頬をはたいた。

「なにをするの、ブルーにあたるなんて卑怯よ」

大間は鞆を抱え立ち上がった。

「ブルー、私と行こう、こんな所にいたら殺されちゃうよ」

お菓子の入っていた薄いレジ袋に池の水を入れながら、大間はブルーをその袋に呼び込んだ。

「ダメだよ、ブルーはこの洞窟から出て行かない」

「なによ小林のペットじゃないでしょ、私だって友達よ」

僕は首を振った。

「そうじゃない、ブルーはこの洞窟から離れては生きられないんだ」

以前、ブルーを胸ポケットに入れ夜の山を散歩しようとした事があった。鱗が乾かないように近くの小川までいくつもりだった。けれど横穴を4、5メートル離れるとブルーに異変が起きた。身体から発せられていた碧い光は炎のような赤に変わり、ポケットの中で苦しそうに身をよじらせ始めた。何が起きているのかよくわからなかった。慌ててポケット

からブルーを取り出した、鮮やかな赤が血のようなどす黒く鈍い輝きにかわっていった。そして終いには痙攣を起こし硬直した。焦った、手のひらに乗せたまま横穴に戻り池にブルーを浅瀬に浸した。だがぴくりとも動かずない、赤黒い光は次第に弱くなっていくばかり。そしてついには焚き火の残り火が消えるように光は失なわれた。暗闇の中、水を叩く尾びれの音も聞こえない。いたたまれず大声で叫んだ。しかし、それもすぐに静けさにのみ込まれた。何度も何度もブルーを呼んだ、何も変わらない、死んだと思った。大切な友達を殺してしまった。言いようのない後悔が背筋を凍らせた。膝を落とし地面に手をつき、頭を池につっこむように崩れ込んだ。泣き声にならない嗚咽が水面をふるわせた。どれくらいそうしていただろう。池に浸した顔の周りがふっと碧く光り始めた。水の中に顔を入れ目を見開いた。いつの間にかブルーは池の奥底に沈みその体からほんのわずかだが光を放っていた。息をのんだ。心臓の鼓動のようなリズムを刻みながら碧い光は強さを増し、それと同時にゆっくりとブルーの身体が浮かび上がってきた。思わず手を水の中に伸ばした。小さな身体を両手に乗せたとき目も眩むほどの閃光が闇を一変させた。と同時に元気のいい尾びれの感触が手を叩いた。あの時の喜びは今も忘れない。

「じゃあ一生この横穴にいななくちゃならないって事？そんなの酷いわ」

大間がくっつかかかってきた。持っていたビニール袋の水が飛び跳ね僕の頬を濡らした。僕はそれを手の甲でぬぐった。

「でも、それがブルーの運命なんだ」

ブルーが恐る恐る水面に顔をのぞかせた。

「ごめんな、ブルー」

頭をなぜながら謝ると、ブルーは指を軽くかんだ。痛みと言うほどではないがささやかな抗議だった。しかしすぐに尾びれを振って僕の手にも身体をこすりつけてきた。大間にはそれが我慢ならないようだった。

「ブルー、おやめなさいよそんなこと、こんな乱暴な奴のどこがいいの」

けれどブルーは離れなかった。嬉しそうに指の間をすり抜け、いつものようにじゃれた。それはまるで僕の指に輝く宝石のようだった。

「ブルー、見損なったわ、このいくじなしと一生この穴蔵で過ごしたらいい、さようなら」捨てぜりふを残し大間は出て行った。日の光を受け彼女の背中が横穴の入り口に影を作った。何か言葉をかけてほしそうに影は暫くそこにとどまった。

「もう来ないのかい」

「ええ、これ以上教える気持ちにもなれないし」

そういって大間の背中が消えた。さっきまで楽しく話していたというのに、僕たちの時間はあっという間に砕け散った。初めから綱渡りしている事ぐらいわかっていた。大間が気まぐれで僕とこうしていた事も。夢から覚めた脱力感が瞼を重くした。彼女の笑い声が耳に残っていた。

夏の日差しがフルパワーで叫び出す午後の2時、国道沿いにある吉野家のカウンターに腰掛け遅い昼食をとっていた。大盛りのつゆだくにプラス卵、豪華すぎる組み合わせには訳があった。今日、例の追試があった。テスト終了後すぐ採点がおこなわれ、結果は数学も

古文もはカンニングを疑われるほど良い点数だった。担任の遠藤先生は狐につままれたような顔で答案を眺めていた。

「あ～あ・・・」

本音を言えば彼女と一緒に祝いたい気分だった。しかしあの日以来、大間が洞窟へ来ることはなかった。奥歯で飯をすり潰しながらもうこれっきりなのかなと思った。両頬をリスのように脹らませたままボンヤリと周りを眺めた。カウンターを取り囲み黙々と牛丼をかつ込む人たち、箸が丼に当たる音が何かの虫が鳴いているように聞こえた。侘びしすぎる祝いは箸の先についた飯粒をしゃぶった時に終わった。うす茶色のコップの水を飲み干し、席を立ちレジの前に並んだ。テイクアウトの人が支払いしている間に財布から小銭を取り出していると、反対側のガラスの向こうでなにやら言い争いをする男女が見えた。少し雰囲気は違ったがまぎれもなく大間だった。中年男が彼女の左腕をつかみ怒鳴った。終いには無理矢理車の中に押し込めようとした。僕は持っていた代金をレジのトレーに放り込み店を飛び出した。駐車場の入り口付近に止められていたセドリックの助手席付近でもみ合う二人、流行の誘拐犯だと思い無我夢中で中年男に殴りかかった。男は太陽の熱に溶けはじめたアスファルトに顔から転んだ。大間は僕に気づくと腕をつかみ言った。

「小林、車に乗って」

「え？でも、こいつを警察に、それに君免許は？」

「昨日取ったわ、そんなこといいから早くして」

エンジンは野太い重低音とともに目を覚ました。いわれるがままに助手席に飛び乗ると大間は一気にアクセルを踏んだ。頬を押さえアスファルトにうづくまる男を残し、車は道路に向かってロケットスタートを決めた。助手席のフロントガラスから見える光景はF1さながらのスリルとスピードだった。

「警察いこうよ」

「なんで」

「なんでって、これじゃあ僕たちが車盗んだことになるだろ、誘拐されそうになって仕方なく犯人の車で逃げたんだって話そ」

「そんなこと心配しなくてもいいわ」

「どういうことだよ」

大間はハンドルから右手を放し、吹き出しそうになる口を押さえた。興奮のさめない僕は不真面目すぎる彼女の態度に腹を立てた。連れ去られていたら命も危いというのに一体何を考えているんだと睨みつけた。

「あの人、母親の男よ」

予想もしなかった答えに僕は頭を抱えた。

「知り合い？それならそうと言ってくれよ。てっきり誘拐犯だと思ってぶんなぐっちゃまったじゃないか」

「いいのよ、それくらい」

髪をかき上げ大間は遠くを見た。

「よくないよ、それに大体なんで母親の男と大間がもめてんだ？なんかあったのか？」

まくし立てながら僕の目は大間の姿を目でなぞった。胸元が大きく開いた麻のタイトなワンピース、一見プレスレットのような文字盤のない時計、爪には濃紺のマニキュア、漆の

ようにしっとりした色の口紅、まるでファッション雑誌から抜け出たようだった。とても自分と同年代とは思えない姿に違和感と疑問を感じた。彼女は僕の視線に気づくと鼻で笑った。

「見れば分かるでしょ、さっきまでデートしてたのよ」

「さっきの男と？」

当然と言いたげに大間は首を縦に振った。

「ええ、服を買ってもらって、食事をして、で、その後は・・・」

それが何を意味するかぐらいは解った。けれどああそうかと頷けるわけもない、誘拐犯だと思った男は実は母親の彼氏で、事もあるうにそいつと娘である大間がデート？だが何よりも不可解なのは、それを何の躊躇いもなく言いのける彼女の神経だ。理解できない僕が幼すぎるのか。

「なんか言いたそうね」

脇道から深紅のスポーツカーが現れ、僕たちの車の前に滑り込んだ。大間は慌てる様子もなく少しアクセルを緩めた。ほっとした、車間距離が少しずつ広がっていく。

「母親は知ってるのかい」

前に行くスポーツカーの二人は恋人同士なのだろう、助手席の女が運転席の男の方にしなだれかかり何か話しかけている。タバコを持った男の左手が窓から外にのび、細い煙の帯が後ろに向かって流れた。大間はそれを見ながら感情のこもらない言葉を漏らした。

「ばかね、内緒にきまってるじゃない」

「そんな事をして楽しいのか」

「楽しいわよ、いけない？」

そういう彼女の横顔は少しも楽しそうじゃない。胸元にのぞく鎖骨のくぼみがやけに深く見えた。痩せたのだろうか？

「幻滅した？いいのよ、それでも」

「投げやりな言い方するね、僕の知ってる大間と違う人みたいだ」

「またそれ？」

この言葉を大間に使うのは2度目だったが、今回は自分なりに彼女を理解した上で使ったつもりだ。

「あいつの事が好きなのか？」

「さあ、どうだろ」

大間はため息をつき、その空気が車の中にどんよりと漂った。

「他人の心配してる余裕あるの？確か今日追試だったわよね」

僕の口に戸を立てるように大間は話しを止めた。

「終わったよ」

「そう？でどうだった」

「大丈夫だった、君のおかげだ」

「なら遊べるんだ、じゃあつきあってよ、それともこんな女とじゃイヤ？」

あの男と何があってあんな喧嘩になったかは解らない。しかし今の彼女を見ていると放っておくことなど出来なかった。前を走っていたスポーツカーが海に向かって進路を変えた。大間は僕の答えも聞かないうちに同じように海に向かってハンドルを切った。車のフロン

トガラスが真夏の太陽へ向かい、きつい日差しが真っ白な彼女の両腕に反射した。

「シートベルトちゃんと締めときなさい、岬までとばすわよ」

つま先の尖った真っ白なハイヒールが一気にアクセルを踏み込んだ。セドリックは見る見るうちに赤いスポーツカーと接近し、一呼吸おくとここぞばかりに一気に抜き去った。危いと感じたのだろうスポーツカーは急激に減速し、そのせいでぶるぶると尻を振った。バックミラーに映る助手席の女は、大きな口を開け怒っていた。大間は何も言わずアクセルをベタ踏みした。もうどうにでもなれ、いやどうにでもしてくれという気持ちになっていた。

夕暮れ近づく岬に腰を下ろし、僕たちは風に吹かれていた。空にはうっすらと月の影、金色に波立つ夏の日本海は冬とはまるで別の海。やわらかな波音は時の感覚を曖昧にし、人の心を丸裸にさせた。大間は水平線を見つめたままもう何時間もこうしている。何も語ろうとしない彼女、僕はかける言葉を探した。気づくと大間は目に涙を浮かべていた。声はない、ただ夕日を映した涙がぼろぼろと頬をつたい落ちていく。

「私、なに泣いてるんだろね」

僕は涙で濡れた彼女の頬を手の平でぬぐった。大間は恥ずかしそうに顔を背けた。

「よしてくれよ～夕日に感動しちゃったなんていうのは」

「いいじゃん」

「え？ そうなの？ いやいや痛いな、なら一緒に砂浜走らないとだめか？」

僕はピエロになろうとした。

「訳を聞かないの？」

「聞いてほしい？」

大間は僕に寄りかかった。

「うん、でも少しこのままでいさせて」

いつしか僕は草の上に横になっていった。夕日は波間に飲み込まれ、さっきまで見えなかった星達が一齐に夜空一面輝きだした。少し強めな風が岬に吹きつけ夏草を揺らした。波と風の音が僕らの空間に蓋をした。大間が深呼吸した。

「今日、お終いにしようっていわれたの」

「そう」

「うん、やっぱり好きなのは母さんで私じゃないんだって」

大間は猫のように体を丸め、僕の腕にからみついた。まるで何かに怯えているように見えた。月が淡い光を夜に投げかけ空の広がりを見せてくれた。けれどそれは地上の僕らまでは照らしてはくれず、互いの姿は暗闇に紛れたままだ。だがかえってそれが二人の鼓動を重ねさせ、一つになったような錯覚を起こさせた。大間の細い指先が僕のシャツをつかみ引き寄せた。

「父さんが死んでから私は変なの」

黙って頷いた。

「父が死んでから母は仕事が終わったら真っ直ぐうちに帰ってくる事もなくなったわ。誰と遊んでいるのか知らないけれど夜遅く、髪にタバコの臭いさせて帰ってきた。化粧し直

したってのが小さかった私にも直ぐにわかった。とっても不潔に思えた。何でこの人が私のお母さんなのっていつも思った。結婚もただの気まぐれ、父さんは初めから死ぬ運命だったんだってね。母への憎しみが更に色濃くなっていった。そして中2になった頃、それは現実の行動となった。母が出張でいない日を見計らって、当時母がつき合っていた彼氏を相談に乗ってと家に呼んだの。たしか医者だったわ。今日みたいに蒸し暑い夜だった、アイスティーをガラスのテーブルに置き彼の横に座った。タンクトップにミニのスカート、男の視線が身体をなめ回した。私は彼を見つめ言った。お母さんが好きになるのも解る、貴方といるとなんか安心できるってね。私は男の肩に頭を乗せた。男は私を抱き寄せてきた。ぎらついた目でキスしてきた、拒まなかった、そしてその夜私は女になったの」

「そう...」

「母さんを幸せにさせたくなかった」

消え入りそうな声だった。僕は大間の頭に手を乗せた。それから母親の男が変わるたびに、大間は横から奪い取った。彼女の口から語られる男たちの話は、女を知らない僕にとって耳を塞ぎたくなるようなものだった。もうすこしで、もう止めてくれと言ってしまいそうになった時、大間がほんの少し笑った。

「でも、さっきのあの人はそれまでの男たちとは違ったの、照れくさそうにはにかむところとか、わがままを言って困らせたときに見せる表情が可愛くて」

「好きになったんだ」

「...わからない、もしかしたら彼に父さんの面影を映したのかもしれない」

「じゃあ彼とは？」

「18歳の誕生日の夜、会社の帰りに花束をもってきてくれた。そのころ母、ゼミの進路指導の部長になったばかりで忙しくてね。私一人の誕生日じゃ可愛そうだって自分も忙しいのに時間作ってくれたの、馬鹿よね普通18の娘が親となんか誕生日するわけないのに」

言葉とは裏腹に、その時、花束を受け取った喜びは今の彼女からも容易に感じ取れた。いったいどれほど孤独な日々をおくっていたのだろうと思った。

「彼は拒んだの、でも私は聞かなかった。キスをせがみ、押しのけようとする手を自分の胸に触れさせた、そして求めたの、さみしいよって」

この三年間、遠くから憧れていた大間と今、傍らで震えている彼女のいったいどっちが本当なのかわからなくなった。

「情けないよね、復讐のつもりで相手した男に弱音はくなんて」

大間は身体を起こそうとしたが、僕は彼女を離さなかった。

「安心したよ」

「なにが？」

「鉄の女じゃなかったんだって」

「なによそれ、そんな風に見てたの？」

大間は僕の胸をたたいた。

「言ったら、憧れの女性だったって。美貌と才能に溢れ精神的にもマッチョな人間の完成型に見えてた」

海風が強くなりはじめ、夜空を流れる雲が星の瞬きを覆い隠した。

「小林の夢こわしちゃったね、ごめんね、ごらんの通り本当はこんな女なのよ」

「そう言う言い方やめなよ」

「じゃなんていえばいい？私は小林の気持ち知ってて利用してるのよ。自分の汚いところ貴方にはき出して捨てられた苦しみから楽になりたいの、だから軽蔑されこそすれ優しくしてもらおう資格ないの」

僕のシャツを掴む大間の手首を強く握った。

「仕方ないだろ」

伏せていた顔をあげ大間は僕を見た。小さな満月の月が彼女の瞳に碧く浮かんでいた。

「馬鹿ね、そんなふうだとこれから悪い女に騙されっぱなしになるわよ」

「君に言われなくても知ってるさ、でもそういう男がいてもいいだろ？それとも大間は迷惑か」

「ええ、大迷惑よ」

「もてない男ってのは馬鹿だって、君も知っとけよ」

このとき大間は初めて声をあげて泣き出した。波の音が高ぶる感情を洗い、月明かりの下、嗚咽が赤ん坊の泣き声のような素直さをあらわにした。

僕はブルーを肩に乗せ夜空を見上げていた。今夜の月は地上近く、黄色みがかり不気味に思えた。

「会いたいな... 大間に」

あれから一週間、何かあったらと互いに教えあった携帯に電話もなければメールもない。続けていた水泳の自主トレにもぶつり姿を現さなくなったらしい。今頃何をしているのだろう、もしかしてあの男とよりを戻し、僕の知らない女の顔で甘えているのだろうか。あの時、ああは言ってみたものの、大間の告白がボディーブローのようにじわじわ効いていた。嫌いになったわけじゃない、そんなことじゃない、大間の話を聞いたとき僕は悲しみと怒りを感じたはずなのに、それを態度に表せなかった。そんな資格、自分にはなかったのだと。それともそんな彼女を追いつめる事など出来なかったと、言い訳は幾らでもできる。けれど本当に好きなら取り乱し感情的な言葉を吐くべきだった。僕は自分の恋心を疑った。薄っぺらな恋だと感じたから彼女は連絡をしてこないのかもしれない。

「恋愛になってないのかもな」

ブルーは大きな魚眼で僕を見つめていた。

「なあ、ブルー、いったい大間は誰が好きなんだ、あの男？それとも亡くなったお父さん？」

この時、初めてどうやったら大間は振り向いてくれるだろうと考えた。今までそんな想像をする自分さえ笑えたはずなのに、その時の僕は彼女と向き合える自分を思い描いていた。でもどうしたら... 一つだけわかっていること、それは好きだけじゃだめだってことだ。突然ブルーは身体を激しくふるわせ真っ白に輝きだした。そしていつかの夜の時のようにその光を洞窟の壁に徐々に集めだした。次第に人影が浮かび上がっていく。それは自分より大きいぐらいのランドセルを背負っていた女の子だった。その子は泣いていた。袖で目を拭きながらトボトボとこちらに向かって歩いてきた。歯を食いしばり必死に泣くのを堪えようとしても頬をつたう涙はとまらない。あまりに切なげで僕は映像に向かって声をか

けそうになった。すると画面が暗くなった。それは女の子に向かって近づいていく男性の後ろ姿となった。映像は男性の肩の下ほどのローアングルにかまえられ、固定カメラのように少しも動かない、女の子の前に立った男性は彼女の目線までしゃがんだ。ポケットからハンカチを取り出すと女の子の涙を拭き、一言二言話しかけた。うつむいていた女の子がようやく顔を上げた。その顔を見て僕は声を上げた。大間だった。確かに幼かったが目元や口元は今の彼女の面影をはっきり残していた。

「この女の子大間だよ」

ブルーはそれには答えず、幼い大間の姿と男性を写し続けた。女の子は泣くのをやめ、なにやら男性の ” 言葉 ” に頷くと、小さな手を男性に向かってのばした。顔の見えないその男性は小さな手を握った。満足そうに微笑む女の子。二人は手を振りながら僕の方に向かって歩き出しカメラを跨ぎ僕の背中の方へ消えた。その後も同じような映像が幾つも映し出されては消えた。それはまるで一人の少女の成長記録のようだった。そしてどの場面にも父親らしき男性がいた。少女はいつも男性の手を独占し、この手は自分の為にあると言わんばかりに僕には見えた。

「ファザコンだから仕方ないって言いたいのかい？でもそれじゃ父親の思い出に縛られ自分を傷つけ生きるしかないじゃないか」

何を言ってもブルーは止めようとしないうえ、こんなにも頑なな彼を見たのは初めてだった。

「あんまりだ、ひどいよ、君だって大間のこと好きだろ」

ブルーは自ら映し出す映像を見つめながら寂しそうな顔をした。そして瞼をゆっくりと閉じた。横穴に溢れていた光は蠟燭の火が消えるように小さくなり、ついに暗闇に取って代わられた。

「ブルー、どこ？」

闇はひっそりと息を殺し、いくら呼んでも豆粒ほどの光さえ見つけられない。怒ったのか、それともあまりに非力な僕に呆れたのか、どちらにしてもこれ以上頼れない事だけは感じた。その時、胸ポケットの携帯着メロがなった。大間からかと急いで取り出すと、緑色に光る液晶には見慣れない電話番号が浮かんでいた。悪戯かと思いつつおいたが着メロが止む様子はない、仕方なくボタンを押すと年配の女性の声が僕の名を呼んだ。

「小林雅俊さんですか？」

「あ、はい」

僕の訝しげな返事に女性は声を改めた。

「突然のお電話申し訳ありません、私、太田産婦人科の看護主任をしております古俣と申します」

「なにか？」

「大間さんってご存じですか？大間百合子というお嬢さんなんです」

「ええ、同級生ですが」

「え、あなた学生さん？この前、彼女と来られた男性の方じゃないんですか？」

看護師の言う男性が牛井屋で突き飛ばした奴じゃないかとピンときた。しかし僕は彼女の問いには答えず反対に聞き返した。

「大間に何かあったんですか？」

「あの、中絶同意書に署名された小林さんてあなたですよ」

その言葉を聞いているんな事が頭の中を駆けめぐった。大間があの男と言い争った訳、あの日取り乱して僕の胸で泣いた本当の意味、そして何日も連絡のない理由、けれどそんなことよりその後の言葉が早く聞きたかった。

「ええ、僕が書きました、彼女に何かあったんですか」

「あのですね、予定通り手術は終わりました。けれど術後も出血が多かったので暫く休んでもらっていたんです。三時間ほどしても状態がよくなるので今日は入院していただくと言う事になったんです。それで今夜泊まれる事をご家族に電話させて下さいってお願いしたんですけど、ご本人がどうしても嫌がられて。お気持ちは分かるのですが当院としましても万が一の事があると困りますので、仕方なく緊急連絡先に書かれていたあなたにお電話を... え！嘘、いなくなった？」

看護師達の慌てる声がスピーカーの向こうで聞こえた。いくつもの足音が響き、遠くで大間さんと呼ぶ声が聞こえた。ほっておかれた僕の不安は迷子のように累乗し増大した。

「ちょっと、看護婦さん、ちょっと、おい、何とか言えよー、おい、おーーい」

我を忘れて叫んでいた。それが30秒だったのか1分なのかは解らない。とにかく長く感じたことは確かだ。そして息を吹き返したかのようにゴトゴトという受話器を持ち上げる音がした。せっぱ詰まった声が僕の名を呼んだ。

「小林さん、大間さんが病院を抜け出したようなの、今無理をしたら傷口が更に開いて大量に出血してしまうわ。もしかしたら彼女ご自宅に帰っているかもしれないから電話番号教えてください」

「すみません、彼女の携帯しか知らないんです」

「困ったわ... 彼女携帯を忘れていったのよ、中を見ようにもパスワードでロックされていて見れないし」

その時、以前噂好きの先輩から聞いた話を思い出した。大間の家はこの町から電車を二つ乗り継いだ駅の前に新しく建った温泉付きマンションだと言っていた。

「あの僕、彼女の家たぶん解ると思うんで行ってみます。もしいたなら病院に連れて帰りますから」

「主任、8号室の篠田さん破水しました。それから10号室の宮川さんチアノーゼ起こしています」

「あ、はい、今行きます、お願いね、待ってるわよ」

電話は一方的に切れた。慌ただしい空気の余韻が耳に残った。

「ブルー、いくよ、やっぱり大間をほっとけない」

そう言うと振り返る事もせず洞窟を飛び出した。淀んだ月は更に赤みをまし、怪しげな雲にその身を浸し、じっとこちらを見据えていた。それはまるで、これから何が起きても知らないぞと脅されるような威圧的な光だった。

僕は親父のバイクを持ち出し、大間の家へ走らせていた。免許なんて持っていない。ただ家の回りを乗り回していたので運転はおてのものだった。道沿いのスーパーやビデオ屋は深夜だというのに光々と明かり、夜をぼやけさせていた。混み始めたので交通量の少ない農道に入った。次第に離れていく国道、ヘッドライトの明かりが数珠繋ぎに見えた。それ

はまるで最近よくテレビでみるドロドロの血液に似ていた。田舎だと思っていた故郷が眠らない町へと変わっていた。バイクは市街地に近づき農道は市道に合流した。里帰りか、観光か、他県ナンバーのワンボックスカーが前を塞いだ。追い越そうとすると派手な電飾トラックが向かってくる。気を抜けばべちゃんこだ。はやる気持ちをじっと我慢しハンドルを握った。気づくと横長のマンションが市街地の明かりに照らされ浮かんでいた。ほどなく広い踏切に出た。貨物車が通り過ぎたばかりの遮断機が斜め45度まであがった。身をかかめくぐり抜けた。焦げ茶色の外壁のマンション、街路灯に照らされた敷地は平坦代わりの低い花壇でオシャレに囲われていた。歩道にバイクを乗り捨て足を踏み入れた。携帯の液晶は11:50。見上げると幾つかの部屋に明かりが灯っていた。エントランスに駆け寄った。しかしそこはオートロックの半透明のガラス扉。たたき壊すほどの勇氣はない。辺りを見回すと一台の車が敷地の中へ入ってきた。外灯に照らされたそれは真っ白なベンツだった。マンション地下駐車場進入口へゆっくりと進路を変えた。迷っている暇はなかった、車へ駆け寄り前方を塞いだ。ヘッドライトで運転手の顔は見えない、回り込み運転席側のガラスを叩き叫んだ。女性だった。その引きつった顔が固まっていた。手を合わせ頭を何度も下げた。運転席のガラスが2センチ下がった。

「なんですか... 変なことをすると警察呼びますよ」

「驚かせてすみません、でも泥棒でも痴漢でもありません、信じてください」

「どちらにしてもこんな真夜中に突然車を止めるなんて非常識でしょ」

「このマンションに住んでる友人の命が危ないんです」

「じゃあご自分で救急車でも呼べばいいじゃない、違う？」

女性はにらみつけた。

「携帯が繋がらないんです。もしかしたら部屋で倒れているかもしれないんです」

なるほどと女性の目尻の角度が少し下がった。

「その方のご家族はいないの？」

「お母さんと二人暮らしなんですけれど、仕事でいつもいないらしくて」

「ちょっと待って」

彼女はガラス窓を全開にした。大きな金色のボタンの付いた黒っぽいスーツに身を包み、プラチナのイヤリングがかろうじ見えるほどショート、さながら雰囲気は敏腕美人女性アナウンサーだった。

「貴方のいう彼女って？」

「大間といいます、大間百合子、高校の同級生なんです」

女性が僕の腕をつかみ自分に引き寄せた。

「今なんて言ったの」

「大間百合子という同級生の命が危ないんです、助けたくてもどこにいるかもわからなくて、もしかしたら家に帰ってるかと思って来てみたんですけど、中に入れなくて困ってるんです。どうか僕をマンションの中に入れてもらえませんか、ご迷惑になるような事は絶対にしません」

「命が危ないってどういう事よ」

彼女の顔に恐れはなかった。その代わり焦りと不安の入り交じった皺が眉間に浮き出していた。ハッとした。もしかしたら...

「本間のお母さんですか？」

「そうよ、ねえどういう事よ、詳しく話しなさい」

「待ってください、話は後にして家に電話かけててもらえますか？帰ってるかだけでも確かめたいんです」

母親は車から降りるとバッグから携帯を取り出し耳に当てた。

「お母さん、部屋の明かりは？」

「あの子、いつも部屋にいるから居間の電気はつけてないの」

マンションを見上げ鎖のストラップを小指に絡め唇をかみしめる。呼び出し音は鳴り続けた。我慢しきれず携帯を閉じ、バッグを抱えてエントランスに向かって走り出した。

僕は母親の後を追った。彼女はエントランス脇に置かれている大理石作りのオートロック解除装置のパネル『指紋感知』に人差し指を置いた。一秒もたたないうちに[本人確認OK]という表示があらわれた。それと時を同じくして半透明の扉が開いた。僕は母親に聞いた。

「一緒に行っていいですか？」

「名前なんて言うの」

「小林雅俊といいます」

「嘘じゃないのね？」

娘が危険な状態にいる事は間違いないのかと念を押された。僕は目を見て頷いた。

「じゃあ来なさい、早く」

3機あるエレベータのうち右から2番目が開いた。まるで僕らが乗り込むのを知っていたかのような感覚。後で知ったがエントランスの扉が開いた時点で各階に止まっているエレベータのうち一番近いものが自動的に呼び出される仕組みになっているらしい。扉が開き重たい空気に閉じこめられた。途端に母親はこちらを振り返った。

「で、百合子はどうしたの」

どこまで話していいのか迷った。

「何、いいなさい」

詰め寄る母親、そうしているうちに扉が開いた。不満そうな表情で彼女はエレベータを飛び出ると、マンションを東西に貫く通路を小走りに駆け抜けた。エレベータから5つめの扉の前に立つとバッグから鍵を取り出した。鍵を差し込み片ハンドルのノブを降ろした。

「百合子～、百合子・・・帰ってるの？」

ヒールを脱ぎ捨て暗闇に飛び込んでいく背中。奥へと続く通路の照明がともった。

「百合子」

あちこちのドアを開ける音、娘を呼ぶ母親の声、玄関に漂うざわついた空気。緊張感が張りつめた。

「いましたか？」

思わず声が出た。

「・・・」

言葉は返って来ない。許しも得ずに上がり込んだ。半開きになっていた扉を開けるとリビングにへたり込んでいる母親の背中があった。

「すいません、勝手に」

母親の手に1枚の便せんが握られていた。彼女は黙ったまま便せんを僕に差し出した。  
『ママへ』と書かれていた。

ママへ

とうとう最後までママは私を怒らなかったね。  
ママ、私のしていたこと気づいてたよね？なのに何故？  
やっぱり愛していなかったから？  
私、ママに抱いてもらった記憶がないの。なんでだろ...  
ママの笑った顔さえわからない。  
私、嫌われてたの？  
産んだこと後悔してたの？  
でも、怖くて聞けなかった。  
昔ね、死んだ父さんが言ってたの。  
ユリの事一番好きなのはママなんだよって。  
そうだったらいいなって、だから、そう信じようとしたの。  
でも、私の側にいてくれたのはパパだけだった。  
ねえ、何でパパまで私から奪ったの。  
そんなにいけない事私してたの？  
わからないの。  
ねえ、私....  
どこへいったらいいんだろ、誰に聞いたらいいの。  
もう寂しいって言う言葉も忘れてしまった。

母親は重い口を開いた。

「ねえ、百合子どうしたの」

声を押し殺し泣いていた。ファンデーションが剥がれ、幾筋もの涙の筋が出来ていた。僕は今日大間が墮胎手術をしたことを話した。出血が止まらない状態で病院を抜けだし、今も危険な状態にいる事も説明した。

「あなたとの？」

答えに迷った一瞬、それで母親は全てを悟った。

「あの人の子供なのね」

再び手紙に目をやり肩を落とした。

「行きそうなところあなたは知らないの？」

「ここに来る前に水泳部のやつらとか、彼女がよく話す女子に連絡とってアドレス教えておきました。見かけたら直ぐ連絡よこすようにって言うておきました。でも今になっても誰からも」

「そう」

「お母さんは知らないんですか？」

「読んだでしょ、娘とはもう何年も話らしい話をしていないの」

あまりに無責任な母親に腹が立った。

「こうなって満足ですか」

アイスピックのような鋭角な言葉で突き刺してやった。

「大間言ってきましたよ、あなたが憎いって。残酷すぎませんか？彼女は貴方を憎んだり嫌われることで家族の絆見つけようとしていたのに、それさえも無視するなんて」

母親は激しく頭をふった。

「そんなに自分が可愛いんですか、なら産まなきゃよかったんだ」

「あなたに何がわかるの」

「何をわかれっていうんです」

「いいわよ、もうやめて」

「いつも、そうやって逃げていたんだ」

「どうしようもなかったの」

「はぁ？母親なんだから、娘一人愛してやれないんですか」

ぶるぶると体を震わせ言った。

「できるものならそうしたわ、でもわからないのよ」

「なんだよ、それっ」

「私ね・・・」

ぼつりぼつりと自分の生き立ちを話し始めた。彼女の母親は彼女を産みそのまま病院で死に、父親は生まれたばかりの娘が片親では可愛そうだと一歳の誕生日を前に、子供が出来ず実家に戻された女性と再婚した。しかし、半年もしないうちに継母は身ごもった。結局不妊は前の亭主が原因だった。そして男の子が生まれた。子供をあきらめていた継母の喜び様は半端じゃなかった。息子を溺愛し、反対に二歳になる彼女を疎んじた。父親のいる前では平静を装い、子供だけになると彼女につらく当たった。時には激しく叩かれ、またある時は食事を与えられなかった。優しい言葉などかけてもらえず、それこそ母の胸に抱かれたことなど一度もなかった。彼女が中学生になると継母は一切口をきかなくなった。それどころか邪魔者は早く家を出て行けといわんばかりに、全寮制の私立高校に無理矢理入学させられた。家に帰ったのは父親が脳溢血で急死した時だった。葬式が終わり後かたづけをしていた夜、継母に『やっとあなたと縁が切れたわ』といわれたそう。その時から彼女は独りで生きざるをえなかった。自分の力だけで大学を卒業し、都会の名門私立高校の教師を経て現在の予備校に引き抜かれた。彼女はがむしゃらに働いた。受け持つ生徒に徹底した指導を行い、高い確率で第一志望の大学へと送り込んだ。人気は鰻上り、美人講師として予備校の看板スターとなった。お金や男に不自由しなかった。けれど心を許せる相手は現れなかった。そんな時に百合子の父、智久と出会った。彼は童話の絵本作家をしていた。たまたま女友達が子供を産み、出産祝いに出かけた時にそこに智久がいた。彼は女友達の義弟で自分の書いた絵本をプレゼントしにきていた。彼女は智久の柔らかな空気に心許し、屈託のない笑顔に惹かれた。そして二人の恋は始まった。彼女は今までの辛かった過去を智久に打ち明けた。孤独、怒り、虚しさ、自分でも驚くほど言葉はあふれ出した。他人にそんな話をするのは初めてだった。智久は彼女が話し疲れ眠るまで聞いた。救われた気がしたと彼女は思った。そしてお腹に百合子が宿った。智久に結婚を申し込ま

れた。けれど返事が出来なかった。家族を持つ事が怖かった。だまって墮そうかと本気で悩んだ。そんな彼女に智久は一冊の絵本を渡した。それを見て迷いが消えた。本の内容を話してはくれなかったが、智久の一途な思いがその本には込められていて、彼と幸せになりたいと思ったそうだ。そして二人は指輪を交わした。

「愛されるってこういう事なんだって初めて気づいたの」

これで自分にも家族が出来る、不安と期待の10ヶ月だった。予定日より2週間遅くにその日はやってきた。想像もしなかった痛みとともに百合子は生まれた。医者は言った。『お母さん似の美人さんですよ』手渡された小さな命は力一杯泣いた。あまりに激しい刹那の叫びに彼女はたじろいだ。この子は自分に何を求めこうも泣くのか、気づくと手が震え傍らにいた智久に我が子を託した。そんな彼女の気持ちを察し、智久は微笑み言った『僕が君とこの子、いっぱい愛してあげる、だから焦る事なんてなにもないさ、よく頑張ったね、ありがとう』、彼女はその言葉を信じ頷いた。その日から記憶にない実母の影を想像しながらの育児が始まった。智久は絵本を書く傍ら、彼女と百合子の世話をした。まるで二人の赤ん坊をあやすようだった。ここちよかった。けれど、どうしても赤ん坊を素直に愛してやれなれなかった。毎日、必死に育児をし、ベビーベッドに寝かせつけるだけで精一杯、赤ん坊の真っ直ぐな瞳に見つめられるとどうしても顔が引きつり笑ってやれない。愛さなくちゃと思えば思うほど、智久が優しくれば優しいほど彼女は自分に閉じこもっていった。そしてその反動は泣きやまないわが子への荒々しい言葉となり、気づくと目をつり上げ手をあげそうになっている自分がいた。

「彼ね、昼間は僕がみるからって、復職を勧めてくれたの。仕事しながらなら気持ちに余裕が出来るんじゃないかって」

一年の育児休暇を終えた後、彼女は予備校に戻った。智久の言うとおりの鬱屈していた自分から解放された気がした。久しぶりの仕事は楽しく、夜遅くまで帰らない時もあった。家にいない母親より、いつも側にいてくれる父親に百合子がなつくのは自然な成り行きだった。いつしか母と娘の間を目に見えないガラスが隔てていた。

「帰るとね、百合子、彼の胸の中でスヤスヤ幸せそうな顔で寝息たててるの。でね、それを見ながら嫉妬してる自分が惨めでね。彼に甘えて仕事に逃げた罰、気づいたときには抱きたくても抱けなくなっていたわ」

彼女は家庭で自分の居場所を無くしていった。智久の愛がなくなった訳ではない。しかし仲のいい父と娘の空間に割り込めなかった。孤独だった。寂しかった。自分が一番いけないと知りながら、智久以外の男性に救いを求めてしまった。

「それが公園で抱き合っていたって若い男なんですね」

その時の自分を悔やむようにため息が一つ落ちた。

「みんな知ってるのね」

「大間、ショックだったって言ってましたからね」

「そう、そうよね」

「でも何故別れようなんてしたんです、少なくとも旦那さんに落ち度はなかったはずでしょ」

「だからよ」

「そんなのわかりませんよ」

「彼は私を救おうといつも必死だった、でも自分が傷ついていってるのに気がつかないの、可愛そうで見られなかった。だからこれ以上側にいちゃいけないって、それで百合子を彼に任せて身を引こうとしたの。でも本当のこと言ったら彼は私を捨ててはくれない、だから嫌いになったと罵ったの」

目にかかった髪を耳にかけ直した。横顔に疲れを感じた。

「それってあまりにも身勝手すぎませんか、可哀想すぎるよ」

「ええ、酷い妻で酷い母だったわ。でも解ってはもらえないでしょうけれど、誰よりも家族のままでいたかったのは私なの」

「父親を殺したのはあなただと大間は言っていましたよ」

「私もそう思うわ、周りにいる人を不幸にしながらじゃないと生きていけないのかもしれない」

それを聞いて、もう何故と問いかえす気にはなれなかった。この母親はずっともがいていたのだ。僕は罪を認め十字架にかけられた罪人を鞭で打ち据えるなど出来ない。母親はしめった声で言った。

「お願い、あの子を助けて」

湿度が上がってきたのか、自動運転になっていたクーラーの羽がモーター音とともに動き出した。カチカチカチという音が二、三秒したあと、なま暖かい風が吹き出し始めた。部屋の角におかれた観葉植物の大きな葉がゆらゆらと揺れた。昔はやった電気仕掛けのダンシングフラワーのようだった。

「貴方はなにもしないんですか」

母親は下を向い鼻をすすった。

「無責任すぎませんか」

「私はあの子をつなぎ止めるものをもっていないのよ、出来る事と言えばあの娘の前から消えるくらい」

「本当にそんな事思ってるんですか」

「追いかければ逃げていくわ、もう許してはもらえないのよ」

そう言いかけたとき携帯にメールが入った。三年間、大間と水泳部で一緒にだった萩原美里からだった。

父が海へ向かってスイカ畑の中を歩く百合子っばい女の子みかけたって  
なんなら電話ちょうだい 何時でもいいから 090-6555-\*\*\*\*

美里の父親は子煩悩で娘の応援によく競技会場にきていた。その際、大間とも何度か話しをしていたのをみている。彼は誰も育てたことのないスイカを県の大学と共同開発していた。昼も夜もなくスイカ畑で新種の栽培に挑む姿は周りの農家にとって異端児に映ったようだが、僕の父親も美里の父親の事を彼は頭のいい情熱的な男だとかっていた。

「あの子みつかったの？」

「まだわかりませんが、でもそれらしい人を見かけたって言うから行ってきます、お母さん

はどうしますか」

しばらく考えた後母親は首を振った。歯がゆかったがこれ以上言い争いをしている暇はなかった。

「彼女から連絡がはいるかもしれないので家にいてください。もし電話がかかってきたら何処にいるのかを聞いて僕が迎えに行くまで歩き回らないように言ってください」

「ええ、そうさせてもらおうわ」

申し訳なさそうに母親は頭を下げた。携帯の番号をサイドボードの上にあったメモ用紙に書いて渡した。

「待って」

脇にあった本革のショルダーを引き寄せ、焦げ茶色の財布からありったけの札を取り出した。

「タクシー代にして、足りなければあとで払うから」

割り切れなかった。というより納得できなかった。娘のことを心配しているはずなのにどんな理由があれどうして他人に任せられるのか。もやもやとしたわだかまりが僕を飲み込もうとしていた。重なって一枚板のような1万円札を手に持ちながら鼻をすすった。

「こんな事しか考えつかないのよ、許して...」

「僕がきっと連れて帰りますから、ちゃんと話し合ってください。このままじゃ誰もすぐわれないでしょ」

「ええ」

短すぎる返事に不安になった。

「約束ですよ」

母親は静かに頷いた。それを見届けると僕は部屋を飛び出した。日付は変わろうとしていた。

左に角田山の気配を感じながら僕はスイカ畑の一本道を走っていた。月は雲に隠れ、湿気たっぷりの闇があたりを包んでいた。ヘッドライトの光に吸い寄せられる羽虫は雨粒のようだ。あのあとマンションのエントランスから萩原美里の携帯に電話をした。まだ父親が起きていたようで詳しい話が聞けた。

「11時過ぎだったかな、赤塚の小屋で農機具なおしてたら、対向車線のライトになんか女の子がとぼとぼ歩いてるのが見えたんらこて。おっかしいなと思って声かけたら百合子ちゃんらねっか、『こんげ時間になにしてるね』言うたら逃げてってしもうた。直ぐに追いかけたるも隠れたんかわからねなった。家に帰って美里にその事話したこて、そしたら命がどうのこうので探してるいうねっか、やっぱなんかあったんだなと思ってすぐに連絡させたんだ。で？この事は親御さん知ってるんだかね」

電話の向こうの声は何事起きたと言わんばかりの抑揚だった。

「今さっき、お母さんに会って伝えました」

「ならいいが、尋常じゃなさそうでなあ、一体どうしたんだね」

「ご心配かけてすいません...」

それ以上詳しく語ろうとしない僕に萩原の父親は少し不満そうだった。

「いや、無理に聞くつもりもないが、俺で出来ることがあれば言ってくれ、力になるから」

「はい」

「いっかね、男はこんげときの為にキンタマならしてるんだれ、男なら絶対女守れいや」  
少し弱音を吐きそうになっていた僕をその言葉がふるいたたせた。

「わかりました」

頭を下げながら丁寧に礼を言い電話をきった。あれから30分、大間を見たという道路沿いに彼女を見つけられないでいた。この道を進めばもう少しで海に出てしまう。馬鹿な事は考えるなと心の中で何度も叫びながら、ライトが照らす道の先に目を懲らした。国道とは違い12時を過ぎると車を見ることはない。プラネタリウムのような満天の星の下、バイクが止まっているような錯覚を何度か感じた。しかし、そのうちバイクは防風林の松林に入った。暫くすると潮の香りを含んだ浜風が頬に吹き付けた。海辺を走る湾岸道路に出たのだ。そこはさっきまでとは違い、ナンパ目的の男達のミニバンと誘惑を待つ女達の軽自動車のがのろろと行き交っていた。車内灯をつけたまま窓から身を乗り出し女を物色する男、同じく車内灯を付けたまま下着のようなキャミソールで肌を露出する女、ときには道路に停まる車の窓から小刻みに揺れる女のつま先が見えた。真夏の夜はエロすぎる欲望で満ちていた。本当にこんな道を彼女は歩いているのだろうか。目のやり場に困り視線を少しあげた。すると前方の夜空に小さな碧い光を見つけた。周りにいた奴らは自分たちの事で頭がいっぱいなのだろう、気づく者はいなかった。碧光は見覚えのあるリズムを刻み発光していた。2回強く光ったあと、周りの何もかも吸い込むようにゆっくりと深く輝きを失っていく。そして完全に闇と同化したかと思うと又光を放つのだ。それは間違いなくブルーが見せる悲しみの表現だった。

「ブルー」

言葉より先に右手はアクセルを回していた。風を切り、対向車のライトの煙幕をくぐり抜け走った。少しずつ碧い光に近づいていく。そして僕はその光の下で言い争う男女を見かけた。男三人が嫌がっている女を無理矢理車に乗せようとしていた。ライトの円が女を照らした。大間だった。金切り声をあげ泣き叫んでいた。

「おまえら」

ひき殺してもかまわない、その時はそう思った。突然現れたバイクに男達の顔が引きつった。クラクションを鳴らしスピードをあげた。大間の腕を掴んでいた男達は彼女から離れた。逃げまどう人影めがけてバイクを突進させた。その時、対向車線に車が現れ、上向きのライトの光が目突き刺さった。何も見えなくなり、バイクごと林に突っ込んだ。車が通りすぎるとあっという間に男達に取り囲まれた。

「お前、なんだ」

男達の乗って来た車が方向を変え林を照らした。ライトを背に受け男たちの輪郭が闇夜に浮かんだ。仲間の一人が又、大間に近づいていこうとした。やめさなければと立ち上がろうとした。すると目の前の男が僕の右頬を横蹴りした。そして避ける間もなく二発目の蹴りが脇腹に入った。息が出来なくなった。

「いやー、やめてー」

別の男に左腕を掴まれ大間が泣き叫んだ。目の前にいた男はチラリとそちらに目をやった。そして薄ら笑いを浮かべながら言った。

「心配すんな、殺さねえから、ただ死ぬほど気持ちいい事は教えてやるがな」

それを聞いた途端、体の中で怒りと焦りが爆発し男の足に飛びついてた。不意をつかれ男はその場に倒れた。その際に彼女を連れ去ろうとする男に体当たりした。男はガードレールに吹っ飛んだ。大間の腕を掴み逃げようとした。しかし行く手に男達が立ちはだかった。反対に逃げようと振り返ると、奴らの車がエンジンを吹かしながらヘッドライトをこっち向けていた。リーダーらしき先ほどの男が握り拳を突き出しながら歩み寄ってきた。相手を待たずしてこちらから殴りかかった。一発はヒットした。しかし、リーダーの両脇にいた男達に挟まれ両腕を捕まえられた。

「あったまきた、てめー死にてえのか」

男の拳が僕の右頬に打ち込まれた。口を切り、その血がリーダーの顔に飛んだ。

「きたねえ、なにすんだ、このやろう」

狂ったように何度も殴りつけられた。両脇の男達も容赦なくヒザげりを腹に入れてきた。

「やめてー、小林が死んじゃうよ、お願い、もうやめて」

「うるせえ、なら、素直に言う事聞け」

アスファルトにへたり込む大間の髪の毛をリーダーは引っ張った。大間は泣きながら首を振った。

「いいんだな、こいつがどうなっても」

リーダーはポケットから何かを取り出した。ライトの光を受けそれはキラリと光った。飛び出しナイフだった。顔を硬直させぶるぶると震える身体、正直やばいと思った。

「じゃああ、お望み通り殺してやるよ」

ナイフの先端が僕の腹にあたった。驚いたのは僕より両脇を固めていた手下らしき男達のほうだった。本当にやるのかという戸惑いを感じた。その動揺がリーダーの怒りをさらに駆り立てた。ここで止めたら下手になめられる。そう感じたのだろう。脅しのつもりが引っ込みがつかなくなった。

「てめえらなにびびってんだ」

リーダーは左手に握ったナイフの尻に右手を添えた。本気だという意思表示だ。それを見た大間が男の足にすがりついた。

「わかったから、何でもする、好きなようにしていいから、小林を助けて」

助け船が来たときリーダーはかっこつけながらナイフを降ろした。

「初めからそういやいいんだ、兄ちゃん、女に感謝しろよ、おい、離してやれ」

組んでいた腕を解かれ崩れ込んだ。男達はせせら笑いながら脇を通り過ぎていった。アスファルトに打つ伏した僕の目に引きずられていく大間が見えた。それはまるで粗大ゴミでも運ぶように手荒だった。

「やめてくれ、彼女は病人なんだ」

女さえ手に入れたらもうお前に用はないと男達は振り返ろうともしなかった。何とかしなければ、そう思った時、胸の携帯を思い出した。震える手でそれを取り出し男達に携帯のカメラを向けた。そしてあらん限りの声で叫んだ。

「おい、頭の腐ったちんぼやろう」

げらげらと笑いながら歩いていた男達の足が止まった。

「なんだと？」

リーダーが肩をいからせながら振り返った。その瞬間、僕は携帯のカメラのシャッターを切った。カシャーという疑似音がスピーカーから流れた。それは奴らにも聞こえたようだった。すかさず大げさにボタンを押してみせた。駆け寄ってくる男達に見えるように携帯を頭上に突き上げた。そして男達が携帯を奪おうとする寸前、暗い海に向かって投げた。

「お前、なんのつもりだ」

リーダーに襟首を掴まれながら僕はおおげさに笑って見せた。

「あんたの顔を僕の悪友に見せてやったのさ、今頃変な男が写ってる写真見て不思議に思ってるだろうよ」

「嘘つくな、こんなに暗くて写るわけがないだろ」

「かもね、でもやつはパソコンマニアでね、どんなに写真が暗くてもソフトで補正しちゃうんだ。すると昼間写した写真みたいに何でも見えるのさ、それに万が一写っていなくても車のナンバーも一緒に送っておいだから、どっちにしてもお前らの素性は直ぐにわかるさ」

襟を掴んだ手と反対の手が振り上げられた。僕はリーダーを睨み付け更にダメ押しをした。

「さあ、殺せ、大間を連れて行きたいならそうしたらいい、明日には指名手配されて檻の中だ、さあ、刺すなり殴り殺すなり好きなようにしろ」

今まで何も言わなかった子分の一人がリーダーの袖を引っ張った。

「やばいっすよ、しんじさん、保釈中じゃないですか」

それを聞いたリーダーは自分を掴む手下の手をふりほどいた、そしてそいつめがけて強烈なけりを入れた。手下は腹を抱え路面にへたり込んだ。

「だまってる」

うめき声をあげる手下を見下ろしながらリーダは立ちつくした。

「どうする、このまま去るなら警察には黙ってやる、しんじさん」

これ見よがしに名前を呼んでやった。リーダーは悔しそうに爪を噛んだ。

「取引のつもりか」

「彼女を助けたいだけさ」

「かっこつけんな」

「いいだろ、かっこつけさせろよ、そしたら感謝するぜ？」

「くだらねえ」

そういうと僕の腹にも一発蹴りをいれた。

「いてー」

「いくぞ」

リーダーはそのまま車に向かって歩き出した。

「しんじさん、女は？」

聞き返す手下の頭をもう1人の手下が殴り付けた。男たちは無言のまま車に乗り込みマフラーから爆音を響かせ走り去った。とたんにあたりは真っ暗になった。何とか立ち上がりわずかな月明かりを頼りに大間を探した。

「大間、どこにいる」

ふらつきながら手を闇の中に泳がせた。するとか細い声がした。

「小林」

声のする方へ近寄っていくとガードレールに寄りかかる人影を感じた。かけより肩に手を掛けるとぶるぶると震えていた。

「しっかりしろ、大丈夫か？痛くはないか？」

泣きながら抱きついてきた。恐ろしさから言葉が出ない様子だった。

「奴らは行った、もう何も怖くないから」

震えを止めようと精一杯強く抱きしめた。歯をガクガク鳴らせながらコクリと頷いた。自分の頬を彼女の頬にあてた。ひんやり冷たかった。背中をさすりながら何度も大丈夫だからと言葉をかけた。暫くしてようやく落ち着いたのか、やっと大間が口をひらいた。

「小林は大丈夫？」

「ああ、なんともない」

咳き込みたいけれどぐっと我慢した。たぶん右目が相当腫れているはずだ。

「ほんとう？」

「無事でよかった、心配したぞ」

涙を拭きながら子供のようにうんうんと頷いた。

「ブルーを追ってきたの、ほらあそこにいるの見えるでしょ」

しゃくり上げながら話す指さす先に、先ほどと違い静かに光るブルーがいた。

「ああ、僕もブルーに気づいたから君の居場所が分かったんだ」

「うん」

「でもよかったよ無事で、とにかく今は病院にもどろう、看護婦さんが心配してるぞ」

「じゃあ・・・何もかも知ってるんだ」

「よくいうよ、緊急の連絡先に僕の携帯番号書いておいて」

「ほかに書く番号なんてなかったの、ごめんなさい」

「もういいよ、とにかく、病院へ帰ろう」

「怒らないの？」

何に怒れというのか、あの男の子供を墮した自分を責めないのかと聞くのか？言えるものならいいかった。『でも僕は君のなにものでもないだろ』またこれだ。どうせいえないくせに、自己嫌悪だ。

「いいから、とにかく、病院へ帰ろう」

大間の腕をとろうとすると彼女はその手を振り払った。

「帰らない」

「そんな事言ってる身体じゃないだろ、死んじゃうぞ」

「大丈夫なの、痛くも何ともないの、ほんとよ」

元気の無かった大間がよほど嫌なのか必死に訴えはじめた。

「何、訳のわからないこと言ってるんだ、怒るぞ」

近寄ろうとすると大間は後ずさりしていく、それ以上行くと対向車線に入りそうで仕方なく追いかけるのを止めた。

「解ったから、なら、どこかで休もう、な？それだったらいいだろ？」

「絶対に帰らないからね？」

念を押すような大間の言葉に、僕はアメリカ人のように両手を広げ頭を振った。いい加減

にしろという怒りと、疲れがそんなオーバーな振る舞いをさせた。(大間にその様子が見えたかどうかはわからない)

「好きにしろ」

結局、病院には戻らず海沿い道路のバス停で休んでいた。バス停はほったて小屋のような作りで、ペンキの剥がれたベンチが暗い蛍光灯に照らされていた。大間は横になり目を閉じている。僕は停留所脇にあった公衆電話から大間に気づかれぬようにメールに書かれてあった萩原美里の携帯に電話をした。

「萩原さんですか？」

つながった方がいいが、一向に返事は帰ってこない。番号違いをしたのかと電話を切ろうとした寸前眠そうな声が聞こえてきた。

「ん・・・あ、小林、ごめん、うとうとして」

「こっちこそごめん、心配かけて」

「いいの、さっきまで起きてたから、で？ユリは？みつかった？」

覚醒して行くにつれて声の輪郭ははっきりしていった。

「大丈夫、変な男達にからまれてたけれど何とか無事に済んだ」

「よかった... ありがとう」

どれほど萩原が心配していたかは彼女の声を聞けばすぐに分かった。

「いま何処？父さんに車出してもらって迎えに行こうか」

「萩原」

「なに？」

「頼みがあるんだ」

「いいよ、言って」

大間が今精神的に不安定で動かせる状態で無い事を伝えた。もちろん落ち着いたら病院に連れて行くつもりだという事も。萩原もある程度大間の事情は知っているらしくそれに関しては何も言わずに頷いた。

「大間の家の電話番号しってる？」

僕は声を潜めて聞いた。

「え、ええ、知ってるわよ」

恐らく状況を察したのだろう萩原の声も小さくなった。

「母親に無事だって連絡してやってくれないか」

「わかった任せて」

「うん」

「それから君のお父さんにお礼言っておいて、僕にもキンタマついてましたって」

「ヤダ、なに言ってんのよ、バカ」

「頼んだぞ」

「あ、小林、ちょっとま・・・」

萩原の言葉を振り切り、シーラカンスのように現代に残ったでかすぎる受話器をフックにかけた。そのあと僕は公衆電話脇に並んで立っている自動販売機でジョージアを2本買った。

た。大きな音がガチャンガチャンと夜に響いた。中学の時、真夜中、町外れの食堂の前にあったエロ本自動販売機から何度か雑誌を買った。その時、機械の中を落ちてくる雑誌の音に心臓が締め付けられるほど響いた。僕はその記憶を反対に利用し缶コーヒーの落ちる音で電話をしていたことを誤魔化そうと思った。夏真っ盛り、ホットなどあるわけもなくジョージアはキンキンに冷えていた。僕はなにもなかったようにバス停の中に戻った。

「電話してたでしょ」

目を閉じたまま大間の唇が動いた。

「おきてたのか」

「寝てないもの」

「そっか」

「あの人の所？」

「いや萩原の所」

「なんで美里？」

「あいつの親父さんが君の居所おしえてくれたんだ、話すと長くなるからやめよ。とにかくみんなが君の事探してくれたんだ」

「そう」

みんなという言葉を使うのは正直ためらった。大間が何を思うかは想像できたからだ。しかし、彼女は何も言わなかった。僕は缶コーヒーを彼女の額に当てた。

「きもちいい」

大間は自分の手で缶コーヒーをもった。僕は自分の缶コーヒーを開け一口口に含んだ。

「何であんな所にいたんだ」

「私にもよく分からないのよね」

彼女の話はこうだった。病院を抜け出したけれど行く当てもなく、気づくとブルーの元へ足が向いていた。(たぶん時間的に彼女の家に向かっている時だ) 洞窟に入ると痛みと貧血で倒れ込んだ。肩で息をするのがやっと、声も出せなくなっていた。すると真っ暗だった洞窟にぽっと碧光りが灯った。ブルーが来てくれた。そう思った彼女はその光に手を伸ばした。人差し指と中指の腹が光に触れた瞬間、豆電球の程だったちいさな光が化学実験でやったマグネシウム燃焼の一万倍程の光を放った。目を閉じる間もない突然の事。けれど瞳はその光に焼き切られはしなかった。それどころか閃光に佇むブルーの姿をはっきりと見つけた。ブルーはなにかを語りかけているように見えた。すると鉛が埋め込まれたようだった下腹部の鈍い痛みがスーと消えていった。

「なんだか眠くなったわ」

ブルーの姿がまどろみの中へ溶けていった。

「気がつくと、ブルーの後を追いかけて歩いていたの、夢の中にいるようだったは」

そのとき既に出血も止まり、痛みも残っていなかったと大間は不思議そうに話した。僕は山で遭難し足の骨を折ったときの事を思い出した。

「ブルーが私をどこかへ連れて行こうとしているような気がしたの」

「心当たりは？」

「ないわ」

「どうするつもりだい」

「いっとくけれど帰らないわはよ」

「心配してるんじゃないかな」

「やめてよ、何にも知らないくせに」

大間はベンチから体を起こした。不快な話を聞かされて、横になにっている事が出来なくなつたと言わんばかりにこちらを睨んだ。

「じつは俺、君を探しにマンションへ行ったんだ」

「へえ、で？」

「君のお母さんにあったよ、部屋に入れてもらったんだ」

「珍しい、大抵午前様なのに、男にデートすっぽかされてもしたのね、それならいい気味」  
その後も大間は口汚く母親を罵った。それはさも自分の行動が当然の成り行きだったのだと正当化しているように見えた。止まらない彼女の言葉に僕は句読点を投げ込んだ。

「君の事話したんだ、そしたら驚いて泣いてたよ」

「馬鹿ね嘘泣きに決まってるじゃない、男はこれだから」

聞くにも値しないとばかりに大間はコーヒーを一気に飲み干し始めた。僕はその横顔が痛々しく見えた。

「そんなに強がらなくてもいいんじゃないか」

「へえ？なんのことよ、まさか私が強がってるって、冗談じゃない、なんでそんなことしなくちゃならないのよ、怒るわよ」

「でも手紙にはそう書かなかったじゃないか、あれは君の本心なんだろう」

本間はそれを聞き、腹を押さえて笑い出した。可笑しくて仕方ないと涙まで拭いて見せた。本当の大間は一体どっちなんだろうと分からなくなった。僕は顔を上げた。夜空にブルーが北斗七星のように止まって見えた。けれどココまで降りてこようとはしない。苦しくないのだろうか心配した。

「ああ書いたらきっと苦しむと思ったのよ、頭いいでしょ」

「そんなに憎い？」

「もうどうでもいい、もう会うつもりはないもの」

「聞いていいかい」

「そういう質問のされ方困るよ」

大間の返事も待たずに切り出した。

「なんでお母さんがそんな態度とってるのか君は知ってるの？」

「あの人はいつも間合いを伺っては肝心な所で逃げていくの、まともに話をした事なんてないのよ、だから分からないわ」

一呼吸置いて大間が横から僕の顔をじっと見た。

「あの人と何を話したの？」

「お父さんと出会う前のお母さんのことさ」

僕は知っているかと目で尋ねた。けれど大間は首を振った。

ほんの数時間前聞いた話を僕は一つ一つ言葉にした。あのとき俯きながら語った母親の体温をそのまま伝えようと思った。大間はじっとそれを聞いていた。毎日のように継母に疎んじられて育ち、仕事に忙しく家庭に無頓着な父親、大人の顔色を伺いながら暮らすうちに殻に閉じこもり泣く事さえも怖くて封じてしまった子供時代。そして必死にしがみつ

てきた家庭からの追放、そして突然知らされた父の死。金太郎飴のようにどこもかしこも苦々しい場面がつらなっていた。すべてを聞き終わった後、大間は目を伏せた。

「もしそれが本当なら、あの人は父さんと何で一緒になったんだろ」

「お母さんを求めたのはお父さんの方さ」

「そう言う事じゃないの、あの人は頭のいい人、自分がどんな事をしてしまうか予想できたはずじゃない、なのに何故結婚なんてしたのかわからないってことよ」

「お父さんにかけてたんじゃないかな」

「どういうこと」

「過去に縛られ、身動き出来ずにいる自分を壊して欲しかったんじゃないかな」

「女を知らないからそんな事言うのよ、女は自分を変えようなんて思わない生き物、そんな窮屈な事するより、ありのままを受け入れてくれるような男を捜すか、そんな男に仕立てていくかのどっちかなのよ」

「じゃあ聞くけれど、今の自分が好きかい」

髪を耳にかき上げ大間が鼻を吸った。自動販売機のブーンという濁ったモーター音が何も言えない彼女の苛立ちに聞こえた。蛍光灯に吸い寄せられた羽虫が目の前で同じ大きさの円を描きせわしく飛び回る。

「どうにかしたい、でも何をしたらいいか解らない、そんな時誰かに手を引いてもらいたと思うのは自然な事なんじゃないかな」

「他人に自分の人生預けるなんて、すべて放棄したって事と同じじゃない」

「僕は君と出会ってやる気になれた、それと同じように出会って人を変えるよ、お母さんもそれに賭けたんじゃないかな」

本心だった。大間に出会って僕は自分の可能性を信じる勇気が芽生えた。だから好きだという気持ちと同じくらい彼女に感謝していた。

「じゃあなんであの人は父さんを裏切ったの、自分から賭を始めておいて勝手に放りだして逃げたじゃない」

「そうだね、君の言うとおりお母さんは逃げ出した」

「結局はそう言う事よ」

大間は吐き捨てた。

「いったよ、赤ちゃんだった君の真っ黒な瞳に見つめられると、何故自分のような女からこんなピュアな命が生まれたんだらうって思ってた。だから自分が抱くと君を汚してしまいそうで抱けなかったって。でもお父さんと仲良さそうにしている君を見て寂しかったって」

「自業自得じゃない」

「お母さんもそう言ってた」

大間は黙り込んだ。

「実は君のお母さんに酷い事言ったんだ、でも今思うと酷な事いったのかなとも思うよ」

「いいのよ、そんな事気にする人じゃないわ」

「そうかな・・・」

「そうよ、だからもうやめて」

大間は耳をふさいだ。すると夜空にいたブルーが僕らの目の前にすーと降りてきた。そし

て大間の鼻をチョンチョンとつついた。彼女が顔を上げるとくるりと反対を向いて元気よく尾びれを振って見せた。その姿は『さあ行くよ』といているように見えた。

「どこに連れて行くつもりなんだ？」

答えはなかった。黙ってついてこいと言わんばかりに前を向いたままだった。しかしその姿は鱗がめくれ痛々しく見えた。

「お前こそ洞窟に帰らなくていいのか？死んじゃうぞ」

それを見た大間は空になった缶を側にあったゴミ箱に放り込んだ。

「私、ブルーと行く」

「おい、病院戻った方がいいって」

「あなただって、なにかあったらブルーが助けに来てくれるって思ったんでしょ、私も同じよ。それに、ついて行きたいの」

どうしても行くという大間の頑なな意志を感じた。ブルーは成り行きをじっと見ていた。彼女は髪を整え靴を履き直した。

「君が心配なんだよ」

「ごめんね、小林」

僕は呆れた。そして腹立たしくもあった。

「これじゃ男が逃げるわけだ」

「いいよ、仕方ないもの」

そう言っておきながら一緒について来てと目は訴えていた。

「行くよ、バイクに乗って」

大間の顔がパーと明るくなった。決着がついたと思ったのだろうブルーは再び夜空高く昇っていった。僕は大間を抱きかかえバイクの後ろに乗せた。スカートの裾が車輪に絡まないうように大間のお尻の下に押し込み整えていると彼女が言った。

「ありがとう」

聞き流した。僕は運転席に腰掛けハンドルを握った。彼女の腕が僕の腹にまわった。

「怒ってるの？」

「あたりまえだろ」

ブルーは碧い光の帯を引きずりながら北の空に向かって星の海を泳ぎだした。

「でも、うれしい」

真っ暗だった空が微かだがしらみ始めていた。朝露の香りを含んだ風は心地よい冷たさとなって肺の中に吸い込まれていった。あれからどれくらい走っただろう。海岸沿いを未だ北上していた。こんな遠くまで一人で来た事はなかった。さすがに尻も痛くなり、どこかで休みたいと思った。けれどブルーがそれを許さなかった。少し目を離すと遙か遠くの空を泳いでいる事がなんともあった。その姿は生まれた川へ必死に戻ろうとする鮭にも似ていた。とにかく一刻も早く僕らを目的地へ連れて行こうとしている強い意志を感じた。

大間は僕の背中に頬を押しつけ話しかけてきた。振動が背骨を伝った。

「なんだ、ん？具合悪いか？」

違うと大間の顔が背中をこすった。

「どうした」

「小林って変な人だよ」

「変態だってか？」

「え？そうなの？」

「なわけないだろ、でなんだよ」

「うん、どうしてここまでしてくれるの？」

何で今更こんな事を聞くんだ、いやな女だと思った。

「さあなんでだろ」

「なんでなの」

「不満？」

「やっぱり、もう嫌いになった？」

「もういいよ」

「なによ、そのぶっきらぼうな言い方」

つまらなそうに呟く言葉が吐息となって背中に降りかかった。

「そうだよ、化けの皮も剥がれたしね、仕方ないよね」

そう聞かれ、あの夜の海で怒る事も出来なかった自分を思い出した。あれ以来、自分を言い訳で誤魔化してはいるものの、切なさは瞼の裏に張り付いたままだった。

「正直、辛かった、なんて事しているんだと怒りたくもなかったさ」

「そう・・・」

「でも嫌いになれなかった、気になって仕方ないんだ」

憧れは少なからず金のメッキで覆われている。僕はようやくそれに気づき、そして大間の本当の声が聞こえるようになった。

「おかしいね」

「君が言うなよ」

「だって、私が貴方ならとっくに見捨ててるもの」

「しかたないだろ」

大間の腕が更に強く僕に巻き付いた。アスファルトは日本海へ突っ込んでいくように左へ弓なりにカーブしていく、明るくなり始めた水平線が斜めに見えた。

「しっかりつかまってる、こけたら二人とも死ぬぞ」

「いいよ死んでも」

「そう言う事は本当に好きな男にいて」

「今ならいいよ」

「それじゃいやだね、お情けみたく」

「贅沢」

「そう言う事言うか、まったく」

大間はクスリと笑った。

「でもね嬉しかったのよ」

「？・・・なに」

「感謝してるって、言ってくれたでしょ」

「ああ、そのこと」

「うん、なんか初めて認めてもらえた気がした」

大間にとっての”初めて”という言葉が理解できなかった。

「何言ってるんだよ、みんなが認めてるじゃないか、頭がよくて美人で、それに」

「上辺だけよ、私を必要としてくれる人はいなかった、頼られる事もね。でも小林は違った」

「劣等感の固まりだったからプライドもなく素直になれたんだらうな」

「聞いていい？」

「さっきそう言う聞き方困るって行ったの誰だっけ」

「女はいいの」

大間の指が僕の腹の肉を摘んでねじった。

「痛いなあ、だからなんだよ」

「『将来何になりたいの』って聞いたら答えなかったでしょ、ねえ、今も言えない？」

そ言えば大間との喧嘩の発端はそんな事だったなと思い出した。カーブだった道は漸く終わりを告げ、漁船の停泊する魚くさい港町に入った。微かにほの明るくなった空に恐竜のような首の長い街路灯が赤い光をこぼしていた。ブルーはその遙か上を黙々と泳いでいた。

「医者になりたいんだ」

昔遊んだおもちゃを放り投げるようにわざと放り投げるように言った。

「医者？」

「あんな成績で医者なんて笑えるだろ」

「笑わないよ、でも何で？」

「俺、次男坊なんだ」

「ねえ、兄弟はいないって言ってなかったっけ？」

「5つ上の兄がいたんだ、でも僕が小学校5年の時肝臓の病気です」

「亡くなったの？」

「手術のしようがなかった」

それはまだ僕が生まれていない頃の話だ。兄、雅巳は小さい頃から何度となく入退院を繰り返す日々を送っていた。肝硬変だった。このままだと20歳まで生きられないだろうと主治医に両親に話した。母は何とか助けて欲しいと懇願した。医師は海外での肝臓移植手術を教えた。だが、それには多額の費用がかかった。これといった財産などない我が家には天文学的な数字だった。諦める、そんな言葉では現せない悔しさが両親をひねり潰した。兄が4歳になった時、それまで国内では認められていなかった生体肝移植手術が承認された。両親は喜び、自分の肝臓を提供したいと医師に申し出た。しかしその望みはあっけなく絶たれた。肝臓移植に必要な型条件を満たさなかったのだ。当時移植には大きく分けて三つの条件が定められていた。1、提供者は2親等以内の親族で、20歳から60歳までの自立した意志決定ができる健常者であること。2、提供する肝臓の大きさは体積の60%までとすること。3、血液型は近い(O型 O型, AまたはO型 A型, BまたはO型 B型, AまたはBまたはOまたはAB型 AB型)ものとする事。父も母もA型でO型の兄には移植が不向きだった。それでも免疫抑制剤をつかえば移植できないことはなかったが父は検査時に心臓に異常が見つかり、小柄だった母の肝臓は小さすぎサイズ的な問題

で許可がおりなかった。また母は早くに二親を亡くしており、僕の家のはあさんも去年脳溢血でこの世を去っていた。70歳になる爺さんは”俺のをやる”と医者に言ったが自殺行為だと医者は聞き入れなかった。すべての道は閉ざされた。しかし両親は諦めなかった。兄を救う為に純粋な提供者を自ら作る事にした。それが僕だった。

「ひどいよ、そんなのモルモットじゃない」

大間が身を乗り出し怒った。

「危ないからじっとしてろ」

しかし僕はそう思わない、僕も兄が好きだったからだ。よく戦艦のプラモデルを作ってもらった。細くしなやかな指、そこから形作られるプラモデル、完成したそれを胸に抱き、僕はよくはしゃいだものだった。兄はそれを見てほんの少し頬を緩ませ微笑むのだ。今思えば、兄の怒ったり泣いたりした顔を見た事がない。どんなに具合が悪くても『大丈夫だから』と頭を優しく撫でてくれた。そして幼い僕は慕った。兄を包む静かで透明な時の香りにふれ、いつの間にか彼の膝で寝てしまっている事がよくあった。

「兄も、大間と同じように頭のいい人でね・・・、憧れの人だった」

兄を助けたいと両親が必死になるのもよく理解できた。だから『雅俊、早く大きくなってお兄ちゃんを助けてあげてね』という母の言葉にも反発した事はなかった。むしろその日が来るのを待ち望んでいた。しかし兄は僕が大きくなるのを待ちきれなかった。僕が小学校5年の晩秋の日、多量の吐血をしてそのまま帰らぬ人となった。両親は生きる目的をなくし抜け殻のようになった。それは僕も同じだった。兄を救う為にこの世に生まれ、そして必要とされなくなった。どうしていいか解らなかった。”いらん子”そんな劣等感から僕は自分に閉じこもった。このときから学校でのいじめが始まった。そんな僕を温かく見守ってくれたのが今はなき爺さんだった。爺さんは兄の死に悲しみくれる息子夫婦の代わりに僕を育ててくれた。

「雅俊、父さん母さんの愛が雅巳をこの世に授け、そして雅巳の生きたいという思いからお前が生まれた。いっか、命ってのはそうやってつながっていくもんら、お前は”いらん子”じゃねえ、お前は自分の命を誰かにつなげねえとだめなんられ。お前にはみんなの愛がつまってんだ、忘れるなよ」

その言葉を聞いてから僕は漸く前向きなれた。

「それで医者なのね」

まだ微睡みの中にいる漁港、軒を連ねる魚の直売所はまだ閉まったままだ。ヴーンというエンジン音はシャッターに跳ね返り黒から紺に変わり始めた空に散っていく。先を行くブルーを見上げながら僕は苦笑いをした。

「単純明快だろ」

「偉いよ」

「どこがさ、なれなきゃ只のホラじゃないか」

「でも、小林はこの前それさえ口にできなかったじゃない」

「実際、話せる状態じゃなかったし、まあ、今もどうかは解らないけれどね、でも初めて他人に話せたよ」

「私が初めて？」

コクリと頷いた。

「うれしい」

大間は言った。

「大間がいなかったら、こんな事一生言えなかったんじゃないかな」

「少しは自信ついたって事？」

「がんばってみようと思うよ、だから」

「なに？」

二つの言葉が舌の先で天秤に掛かっていた。僕はそのうちの軽い方をあえて選んだ。

「こんな気持ちにさせてくれた大間に、僕の出来る事をしたいんだ」

夜中より明け方の風の方が冷たく感じた。しかし寒いというのではない、細胞の一つ一つの濁りを取り去り透き通らせるような涼しさだった。西の空が一気に明るさを増し、朝靄の中から海に落ち込むように急な斜面の山が現れた。山頂を綿帽子のような雲が覆い隠していた。ブルーがその雲の内めがけて方向を変えた。そして大間にも変化が現れた。背中に押しつけていた顔を離し、キョロキョロと辺りを見回しだした。

「あっ」

突然、大間が声を上げた。驚いた僕はブレーキをふんだ。

「どうした、具合が悪い？」

「ここ・・・」

大間はバイクを降りた。そして大きく目をあけ360度まわりの風景を確かめ始めた。

まるで夢を見ているよう顔だ。

「おい、大間」

「私、昔、ここへよく来たは、泳ぎを覚えたのもこの海」

大間は記憶の淡い影を読みとり始めた。保育所の年中になった頃、親子で度々この海の近くにあるコテージに来ては週末を過ごしたそうだ。ほっておけば離れていってしまう妻を繋ぎ止めようと父がしていたのだらうと大間は当時の自分たち家族を語った。

「この道をいくと山を登っていくの、するとね」

林の中でこぼこ道を行くと高台にでるらしい。日本海を見渡す眺めのいい場所だと大間は言った。

「貸しログハウスが5棟程建っているの、この場所に来ると母も努めて明るく振る舞おうとしていたのか、普段より笑い声が多かったの。もしかしたらこれが本当の私たちなのかもしれない、そう錯覚し、はしゃいだは」

彼女の言葉は自分たち家族にも木漏れ日がさした時があったのよと聞こえた。話し終わる頃に空から星は消えていた。

「でもなんでだろ、ねえブルー」

大間はブルーを呼んだ、だがそのときにはブルーの姿もどこにも見えなくなっていた。彼女は地図を無くした旅人のように途方に暮れた顔をした。

「心配すんな、ブルーは僕らをおいていったりしないよ、すぐ又現れるさ、それに僕がいるだろ」

大間の手をとった。細い指、その指先が冷たく感じた。両手で暖め、ふと思った。僕は何をしているのだらう。ほんの少し前まではダメ犬だった男、それが今彼女とこうやって夜を駆け抜け朝を迎えている。ハッと気づいた。生きているってこういう事なのかもしれない

いと。

「大間、いこう、思い出のその場所へ。昔の君にあってこよう」

握っていた大間の手にそっとキスをした。

山頂は霧に包まれていた。アスファルトは砂利道に変わり、次第に細くなっていった。視界はほんの数メートル先までしかなく、まるで神秘の森に迷い込んでいくようだった。大間は身を固くし背中にしがみつくと。エンジン音が木々にぶつかり四方八方で聞こえた。どこまで登っていけばいいのか、天まで続きそうに思えた道の先に、ログハウスの群れが姿を現した。

「あれかい」

大間は頷き、そしていちばん隅っこのログハウスを指さした。僕はアクセルを戻しゆっくりと停まった。そして明け切らない霧の向こうに目を懲らした。それは日本史の教科書でみた高床式倉庫のような作りのログハウスだった。エンジンを切りバイクを降りた。ガラスの曇りを拭き取るように風の固まりが吹き抜けた。ぼやけていた視界が一瞬にして鮮明な縁取りを見せた。それとは反対に大間の横顔が曇った。そのわけはすぐに僕にも分かった。ログハウスの片隅に真っ白なベンツが停まっていた。昨夜マンションでみた大間の母親の車に似ていた。

「もしかしてお母さんの？」

「たぶん、ねえ小林、どうしょう」

大間の足がとまった。動けなくなったと言うべきかしれない。その時、ログハウスの窓が碧く光った。レースのカーテンをくぐり抜けブルーが姿をみせた。早く早くと口先でガラスをコツコツと突いた。大間は僕を見上げ、戸惑いを見せた。

「どうする」

「会いたくない」

「それでいいのか？」

「どうしろっていうの」

「あんな手紙一枚で家出するなんて後ろから頭殴って逃げるようだろ。どうせ出て行くなら派手に喧嘩して思いっきりなじってやったらいい。そしたら綺麗さっぱり別れられるんじゃないか」

悪戯っぽく笑って言ったやった。

「それでもいいの？」

「あとで後悔するよりいいだろ。それに、なるようにしかならないさ、大丈夫だってずっとついてる」

大間の目が不思議そうに僕を見た。

「小林、かわったよね」

「なら惚れてくれたらいいのに」

「頭に乗るな」

僕は大げさに肩を落として見せた。それは思いを寄せる女性に肩すかしを食ったチャップ

リンのようにだ。大間は笑ってくれた。そして穏やかな顔になり、頷いた。

「うん、わかったわ」

「じゃあいくか」

大間の手を引いてログハウスに向かって歩き出した。彼女は僕とつないだ手を放すまいとした。丸太を半分に切った階段を登り、まだら模様にシミの浮き出ている杉板のドアの前に立った。ログハウスの中からは音は聞こえてこない。真鍮のドアノブに手を掛けた。大間は僕の背中に隠れるように張り付いた。ゆっくりとノブを回し、中が伺えるだけドアをあけた。薄暗い家の中に小さな火がみえた。静かに揺らめく様子からしてストーブらしい。

「ごめんくださーい」

足を踏み入れると同時に外の光が中へと差し込んだ。部屋の隅に映画でしか見たことのない薪ストーブがあった。その真向かいには大きなソファがみえ、中央には如何にもログハウスにありそうな一枚板の素朴なテーブルがあった。壁には女性の好みそうな蔓で作ったリースがいくつも飾られてあった。見回しても大間の母の姿は見えない。

「すみませーん」

そう言い終わらないうちに、正面のソファの背もたれの後ろ付近が碧く光った。その光のする場所へ駆け寄ると、床にすわりソファに寄りかかる大間の母親がいた。

「おばさん」

声を掛けると薄目を開けた。

「ああ、君」

力のない、しなだれた指が僕の服をつかもうとする。僕はその手をとった。百合子もそばに近寄ってきた。

「やっぱりここだったのね」

娘の姿が視界に入ってホッとしたのだろう、表情が柔らかくなった。

「具合が悪そうですね、大丈夫ですか」

「眠っていただけよ、なんでもないわ」

母親は僕の手を振り払った。そして体を重そうに起こしながら、ソファの背にもたれた。怪訝そうな顔で大間は言った。

「なんでここにくるってわかったの」

「萩原さんから電話あってね」

大間が僕をにらんだ。しかし、大間は無事だと連絡はしたがそれ以上の事を言った記憶はない。第一、この場所自体今さっき初めて知ったのに話せるはずもない。

そう言いかけたとき、母親がぼつりと言った。

「波の音よ」

電話の後ろに波の音が聞こえたと言ったそうさ。

「私があなたと知ってる海はここだけだから」

つなぎ止めるものがない親子のはずだった。しかし、母も娘も細い記憶の糸で繋がっていた。大間は複雑な顔をした。

「帰らないわよ」

「連れ戻しに来たんじゃないわ」

話すほどに呼吸が辛そうになり、額にはうっすらと汗が滲み始めた。

「おばさん、病院に行きましょう」

「ええ、これを渡したら帰るから」

母親は側に置いてあったショルダーバッグを手に取った。

「保険証と着替え、それにこれよ」

バッグの中から預金通帳を取り出し大間に渡した。大間はそれを中指と人差し指で取りあげた。金額欄に目を通し驚きの表情を見せ、すぐさま通帳を反対にし母親の方に向けた。

「なによこれ」

窓から差し込む朝の光に僕にもかろうじてその数字が確認できた。1の後に0が・・・、頭の中で指を折ってみた。思考が停止した。

「お父さんの保険金を積んでおいただけよ、バブルの時だったから利率もよくてね倍以上になったは」

「そんなこと聞いているんじゃないわ、こんな大金私みたいな子供にあずけてどういうつもりって聞いているのよ」

「出て行くんでしょ」

「へえ、じゃあ何、手切れ金ってこと？」

「ええ、そうよ、それにユリはもう子供じゃないでしょ」

「なによそれ」

唇が震えていた。それでも母親は止めなかった。

「もう好きなように生きていいのよ」

一筋の涙が大間の頬を伝った。悲しそうな目をしていた。

「ちょっと待ってくださいよ、そんな言われ方したら彼女が可哀想だ」

「いいのよ、この子もよく知ってるわ、ねえ、そうでしょ」

大間は顔をそむけ唇を噛みしめ涙をぬぐった。

「聞いたでしょ、こういう人なのよ。なんでもお金ですまそうとする人、でもまさかここまでするなんてね、それも一億ですって。とことん私が嫌いなのね。いいわ、貴女の前に一生現れるつもりもないし、もう顔も見たくない。それどころか母親がいたことさえ忘れてやるわよ。どうそれで満足？」

「ふふ、おかしい、母親だなんて思ったことない癖に」

目をむいて母を睨み付ける娘、少しぐらいの言い合いは覚悟していた。けれどこれは母と娘の斬り合いだ。無責任といわれれば言葉もないが、どう二人を止めていいかもわからず僕はあせった。

「まあいいは、正直、私も疲れたのよ」

目にかかった髪を母親はうざったそうにかき上げた。

「そう」

大間は母親に背を向けた。玄関から差し込む朝の光が彼女包んだ。肩が震えていた。

「あんたなんて、死ねばいい」

そういうと玄関から飛び出していった。苦しそうな表情で見送る母親、しかし何故か目元は満足げに見えた。走り去って行く大間が踏みしめるジャリの音。

「なにしてるの、あの子の側に付いていてやって」

「おばさん」

不安げな僕の言葉に母親は首を振った。

「優しい子ね、私は大丈夫よ、だからお願い」

そういつて背中を押された。潤んだ瞳の奥に覚悟を感じた。僕は頷き大間を追ってログハウスを後にした。まだ靄の残る木々の小道を大間の後ろ姿が小さくなっていく。走った、走った。今まで生きてきた中で記憶にないぐらいに早く大間を追いかけた。大きな声で叫んだ。何を叫んだのかもわからない、うなり声だったかもしれない。情けない声だったかもしれない。今見失ったら二度と会えないような、いや大間がこの世からいなくなってしまいそうな気がした。

「いくな、いかないでくれ」

このまま彼女を見失ったらもう一生あえない、そんな気がした。そんなのは嫌だ、絶対に嫌だ、焦りが土壇場ではじけた。突然大間の足が止まった。しかし坂道で急に止まったせいで彼女は前のめりに転んだ。すぐにかげより抱き起こした。目は涙で一杯だった。鳴き声も声にならない。わかったからと背中を抱いた。すりむいたのか肘や膝から出血していた。持っていたハンカチを引き裂き両方の傷口を軽く縛った。

「大丈夫か？痛いところないか？」

昨日の事もある、とにかくひとまず病院に連れて行こうと思った。

「病院に行こう」

大間は何も逆らわなかった。僕は彼女を背負いバイクを止めてある駐車場まで歩き出した。相当ショックだったのだろう、凍えるウサギのように小さく身体を縮めていた。駐車場まで戻ってくると二人とも声をあげた。ログハウスの窓という窓が激しく光っていた。それは間違いなくブルーの放つ閃光だった。胸騒ぎがした。大間も何事かが起きていると気づいた。

「やっぱり、あのままにはしておけない」

「いやよ」

「本当に君はそれでいいのか」

「もう何も考えたくない」

耳を塞ごうとする大間に行った。

「君の好きなお父さんならどうすると思う」

「そんなの、ずるいよ」

「ごめん」

いやがる大間を背負ったまま、ログハウスの階段を駆け上った。そこには大間の母親がうつぶせに倒れていた。床には壁に投げつけられ壊れたのか携帯がバラバラになって落ちていた。傍らでブルーが光を放ちながら母親を見ていた。事態は深刻なのだ直感した。

大間を降ろし母親に駆け寄ろうとすると。ログハウスの外で人の声が出た。

「どうかしましたか？」

他のログハウスに宿泊客していた客が、騒がしい物音に気づき出てきたのだ。

「ああ、彼女のお母さんが」

それを聞いた宿泊客はログハウスの中に入ってきた。咄嗟にブルーは光るのを止め僕のポケットに逃げ込んだ。客は突然消えた光に首を傾げたが、それよりも虫の息の母親を見て顔色を変えた。そして腕の脈を取り、瞳孔を確かめた。

「とても危ない状態だ、時間がない、僕の車で病院へ運ぼう」

「貴方は？」

「消防隊員だ、そんな事よりお母さんを運ぶのを手伝ってくれ」

彼は休暇で家族とこの海に来ていたのだ。ステーションワゴンに二人で母親を運び入れる途中、真ん中のログハウスからパジャマを着た奥さんらしき女性が口を押さえながら出てきた。

「急病人だ、ちょっと行ってくる。風邪をひくから中に入ってなさい、あとで電話するから」

慣れているのか慌てもせず女性は分かったと頷き何かを隊員に向かって投げた。

「貴方、鍵」

隊員はそれを受け取ると、後ろのドアをあけ座席をフラットにした。そしてゆっくりと母親を寝かせると僕を見た。

「君、免許持っているかい」

「いいえ、運転なら彼女が」

大間はボーと車の前で立ちつくしていた。

「何をしている、君が運転するんだ」

隊員は母親の側に正座し、頸動脈に指を当てた。しかし大間はまだ躊躇っていた。僕も後部座席に乗り込みながら言った。

「さっきまで、彼女たち喧嘩してて」

それを聞いて隊員は彼女を一喝した。

「何があったかはしらんが君を産んでくれた人だろう、その恩は返せ」

我に返ったかのように大間の目つきが変わった。彼女の心の中がその時どうなっていたのかは分からない。憎しみなのか、寂しさなのか、義務なのか、無意識なのか、それとも未練なのか。大間の固まった表情がバックミラーに張り付いた。

「しっかり掴まっててください、飛ばします」

この前を知るだけに僕は助手席のヘッドレストにしがみついた。案の定、車はいまにも転げ落ちそうにな勢いで山道を下った。正直、今度こそ死ぬかもしれないと思った。

「大間」

「なに」

「安全運転・・・」

「うるさい」

病室のベッドに横たわる母親を見つめ大間はため息をついた。半日以上も意識不明のままだ。壁の電気スタンドの明かりが編み目模様のカーテンに大間の影を映していた。蒸し暑くて開けた窓から微かな夜風が流れ込んでいた。僕はブルーを看護婦さんに借りた洗面器に泳がせていた。容態を確かめに来た医師は透析の機械を調整しながら言った。

「お母さん、予定されていた透析を受けられなかったようですね」

運び込まれた時、看護師がバッグの中の診察券を見つけ、病院に連絡を取り分かったらし

い。母親は重い腎臓病だと先方の医師から説明を受けたと目の前の医師は話してくれた。なんでも大間の母親は出産時、何らかの原因で糖尿病になり、それが悪化し腎臓病へと...そしてここ10年は週に3回透析を続けていたそうだ。最近は病状が思わしくなく、担当医師は仕事を休み入院するよう忠告していたらしい。それを聞いた大間の顔は真っ青だった。彼女の顔をみて医師の方が反対に驚き聞き返した。

「何にも知らなかったんですか？相当無理をしていたようですよ」

大間は両手で自分の肩を抱き目を閉じた。僕は医師に聞いた。

「助かりますよね」

心電図モニターの波形を確かめる医師の顔はとても暗かった。

「全身状態が相当悪すぎます。意識が戻るかも...とにかく今夜が山です」

医師が病室を出て行った後、大間はパイプ椅子にうなだれた。

「やっとわかったわ」

「なにだい」

「母は私を産んでこんな身体になった事をずっと恨んだのよ」

「考えすぎだ」

「いいの、それなら納得がつくもの」

「ちがうって」

大間はとても疲れて見えた。年齢が分からないくらいにやつれて見えた。ここに来て無理矢理彼女も婦人科の女医に診てもらっておいた。彼女の言うとおり出血も止まっていた、しかし、やはり精神的にも肉体的にも限界なのだろう。そしてもう一人、いやもう一匹限界を超えそうな奴がいた。

「ブルー、大丈夫なのか？なんならお前だけ連れてかえってやろうか」

けれど、ブルーは言う事を聞かない。見ると鱗が所々剥がれ白い肉が無惨にのぞいていた。僕は自分の勝手で大間に引き合わせた事を後悔していた。これは僕の問題だ、なのに優しすぎるブルーはほっておけないのだ。病室には又僕たち三人と一匹だけになった。ブルーは洗面器から宙に泳ぎだした。その姿は洗面器の真上から見るより痛々しかった。それでも大間に元気をだせと尾を精一杯振って見せた。大間は目を背けた。

「やめて、そんな気分じゃないの」

その時、病室のドアを誰かが叩いた。ブルーは大間の背中に隠れた。

「あの、お渡しする物が」

看護師の声だった。僕は病室から出てそれを受け取った。絵本だった。なんでも処置室で母親のバッグを開けた時、この絵本が中に入っていて籠に取り分けて置いたのを忘れてしまったらしい。病室の扉を後ろ手で閉めながら本を見た。題名『君と』。僕にはそれが若き日の大間の父から母に送られた本だと直感した。子供を堕そうかと結婚に悩んでいた女性に手渡された一冊の本。それは製本された立派な物ではなく、画用紙に書かれた手作りの素朴なものだった。大間に見せようとしたが彼女はベッドにうつ伏している。ブルーは不安げに彼女を見ていた。なんだか自分以外のものが止まって見えた。僕は壁に寄りかかり表紙をめくった。そしてそれは太陽が照りつける砂漠の風景から始まった。

ある日、風に乗ったタンポポの種が燃える砂漠に舞い落ちた。長旅に綿毛はちぎれ、タンポポの種は二度と飛べなくなっていた。殻を破り芽を出そうにも、一滴の雨さえ砂漠には降らなかった。種は空を見上げ、太陽が雲隠れるその時を只ひたすら待った。しかし、太陽は知らんぷり、我が物顔に吠えたてた。何故、こんな所へ連れてきたと種は風を恨んだ。くるしいよ、さみしいよ、広い砂漠の真ん中で心だけが彷徨った。

ある夜、見た事もない物が空から降ってきた。月明かりを受け碧く輝く身体、種は恐る恐る声をかけた。

「あなたは？」

「湖に住む魚だよ」

なつかしい水の香りがした。

「こんな所へ何しに来たの？」

「竜巻に吸い上げられてね、でも、空の旅は最高に楽しかったよ」

言葉とは裏腹に、砂にまみれた姿は辛そうに見えた。

「大丈夫？」

「うーん、のどがカラカラだよ」

「もしかして死ぬの？」

「たぶんね」

「いいわね」

恨めしそうな種という言葉に魚は訪ねた。

「君は死にたいの？」

「ええ、消えてなくなりたい…」

行き場のない気持ち、種は思いの丈を打ち明けた。

「そう、よく我慢したね、つらかったらさ」

その言葉を聞いて種はたまらなくなった。

「優しくするのはやめて、どうせすぐにまたひとりっぼっちよ」

「一緒にいてあげようか」

息も絶え絶えなのに笑って見せる魚、種は声を荒げた。

「嘘つき」

「なんで？」

「今、言ったばかりじゃない、もうすぐ死ぬって」

魚は身をよじった。

「君が望むなら」

「なら？なに」

「君が望んでくれるなら僕は永遠に生きることだって出来るんだ」

「ほんと？」

「うん、でも一つお願いを聞いてほしいんだ」

そう言っている間にも濡れた身体は見る見るうちに光を失っていく。痛々しくて種は見えていられなくなった。

「何、早く教えて、早く言って」

暫く考えたあと、魚は瞬きをした。

「きれいな花を咲かせた君の姿を見せて」

何を言い出すのだろうと種は思った。

「雨も降らないのにどうやって花を咲かせるの、芽さえ出せないの、無理よ」

そう言っている間にも魚は弱っていった。

「大丈夫、僕と一緒にいてくれたなら、だから信じて」

種は困り果てた、けれど答えは求められている。もう待つてはいられなかった。

「わかったわ」

「ほんとだね？」

「ええ、咲かせるわ、そして諦めない」

魚は嬉しそうに頷いた。

「ありがとう」

そう言うと魚は大きく口をあげ、次の瞬間、種を飲み込んだ。

「何をするの」

「安心して、そこはお腹の中さ、僕は水の固まりのようなものだから、君に僕の身体を飲んで欲しいんだ」

「だめ、あなたが死んでしまう」

暫くして言葉が返ってきた。

「大丈夫さ」

「絶対いや、こんな事はやめて」

拒んでも乾ききった種の身体は魚の潤いを吸いとっていく。

「苦しくない？」

「苦しくなにかあるもんか、幸せだよ、僕の中に君がいてくれる、だからがんばれる」

「でも、私が芽を出すときは吐き出してね、じゃないと本当にあなたが死んでしまうから」

「それは大変だ、寝ちゃいけないね」

魚の笑う声がおなかの中に響いた。

「待っててよかった・・・」

辛かった日々が洗い流されていった。そして砂漠にいることを初めて嬉しいと感じた。

それからいろいろな話をした。種が遙か遠くの小さな島国からやってきたこと、母は子供たちの通う学校のグラウンドに咲いていたこと、ある日の夕暮れ、少女が自分たちを見つめ夕焼けの空に向かって吹き飛ばしたこと、あかね雲の上に出たときの夕日の美しかったこと。

「サソリがね、私を転がして『まずそうだ』って言うのよ、本当に失礼しちゃうわ」

潤いに満ちたお腹の中で丸々と太った種ははしゃぎ、そして笑った。

「よっぽどヘンテコリンに見えたんじゃない？」

「なによ、ふん、ねえ貴方もなにか聞かせて」

「僕の話はつまんないよ」

「いいの、聞かせて」

種は身体を揺さぶり魚にせがんだ。そのうち根負けをした魚は少しずつ話し始めた。

「ええとね、僕の故郷は雲より高い山の麓の湖でね、湖の底から雪溶け水が絶えず湧き出

し、水辺には色とりどりの美しい花が咲くんだ」

それを聞いて種は黙り込んだ。

「どうしたの？」

「私はあなたの故郷の花のように綺麗に咲けないかもしれない」

「本当にそう思う？」

「あなたをがっかりさせてしまうのが怖いの」

魚は種に語りかけた。

「君と僕の花だよ、そうだろ？」

それを聞いて種は嬉しくなった。

「そうね、私たちの花よね」

「うん、もう一息だよ、祈ろう、美しく咲けるように」

「そうね」

生まれ変わる自分を想うと、種は叫び出したくなった。

そしてその時がやってきた、種は体の中から突き上げる力を爆発させようとしていた。

「もうすぐよ」

「そうだね」

「何しているの早く吐き出して」

魚はだまりこんだ。

「どうしたの」

「もう僕には、そんな力は残っていないんだ」

「じゃあどうするの」

「このままでいい」

魚の言っていることがよくわからなかった。もう自分の身体は待ってくれない、それどころかますます勢いを増し今にも殻を破りそうだった。

「お願いよ...吐き出して」

「もう君が僕の全てなんだ、好きだよ、ずっと...ありがとう」

その言葉を待たずに殻は破れた。そして勢いよく芽を腹の内側に突き立てた。一度放たれた力はもう押さえが効かない。一気に皮を破り光あふれる砂漠に飛び出した。

既に魚は死に干からびていた。目はくぼみあの月の夜見た面影はどこにもない。タンホポの芽は絶句した。それを見ていた太陽は言った。

「魚は君を飲み込んで直ぐに死んだんだ」

「そんなはずはないわ、私たちはずっと話していたのよ」

「でも本当のことさ、サソリも砂蜘蛛もみんなしっている」

「魚は私をだましたの？」

「いいや、魚は死んでも生きていた、いくら私が照りつけようと君を守ったんだ」

タンホポの芽はやりきれなかった。何の為に咲けばいい、誰に自分を見せたらいい。

うなだれる芽に太陽は言った。

「砂漠のみんなが、君が咲くを待っている」

サソリが砂蜘蛛と連れだって寄ってきた。

「俺も花という物をみてみてえなあ、いや食ってみたい、なあいいだろ食わしてくれよ」  
芽は悔しくなった。こんな物たちに見せる為に咲きたいんじゃない、でもそうさせた魚に当てつけてやりたい。そうでもしないとやりきれない。

「いいわ、みてらっしゃい」

芽は魚の亡骸を身にまとったまま空を見上げた。

砂漠に又夜明けがやってきた。月と太陽が西の空と東の空に並んでいた。

サソリと砂蜘蛛、そして風もいた。砂漠で初めて咲く一輪の花、誰もが固唾を飲んで見守った。蕾はゆっくりとその身をほどき始めた。しかし緑色の肌は堅く、思うように開けない。その時、身体の奥で懐かしい声が聞こえた。

「さあ、もう一息」

身体が熱くなっていく。

「うん」

蕾は緑色の肌を思いきり押し割った。そしてようやく花びらが開き始めた

一枚、又一枚、伸び伸びと自らを咲かせていった。

月はその姿を見てあまりの美しさに言葉を失った。

サソリはいつものように思った事をそのまま口にした。。

「綺麗だなあ、月よりも碧いなんて、ちくしょうこれじゃくえねえや」

サソリの言葉にタンポポは我が身をみた。夜明けの光に浮かぶ花びらは碧く輝いていた。

それはあの夜見た魚の碧そのものだった。太陽はしみじみ言った。

「君らは一つになったんだなあ」

タンポポは誇らしげに頷いた。それを見て月は嘆いた。

「私もあなたのように愛されてみたい・・・」

タンポポはもう何もいらなかった。茎をしゃんと伸ばし砂漠に向かい、つめたい空気を吸った。

「さあ、種になってあなたの好きな空を飛びましょう」

僕は本を落とした。病室の床に広がるページ。ブルーが僕を見ていた。唾を飲み込んだ。

「ねえ、ここに出てくる碧い魚って君の事かい」

痛々しいブルーの身体が碧く光り出した。

「でもこれは大間のお父さんがお母さんに送ったものだろ？なんで君が」

ブルーはベッドに横たわる母親を見た。それはとても優しい目だった。大間が顔を上げた。

「どうしたの」

本を拾い上げ大間に渡した。彼女は目をこすりながらそれをめくった。次第に表情が険しくなった。大間の母親に聞いた本の存在を彼女に話した。

「この本に出てくる魚って、お父さんよ」

大間は本の一行を指さし言った。

「ここを見て、『もう一息』って書いてあるでしょ。これってお父さんの口癖なの」

ブルーはそわそわし始めた。それを見て僕はある事にづいた。

「もしかして君は…」

大間も僕のときれた言葉の先を感じ取り、大きく目を見開いた。

「おとうさん？」

ブルーは恥ずかしそうに頷いた。大間は口に手を当てた。

「本当なの？」

母親を見た時と同じ愛しいものをみるようなブルーの瞳。見つめ合う一人と一匹、いつしか互いの目を涙が覆っていた。

「どうしよう、お父さん、お母さんが、ねえ、どうしよう」

ブルーは慌てなかった。

「ねえ、お父さん、どうしよう」

いつもの自信に満ちた大間とは全くの別人がそこにいた。まるで親にはぐれた幼子のようにだった。父親の存在が張りつめていた心の糸を緩めたのだろう。僕は壊れかけた家族を見つめていた。するとブルーの身体が昨夜のように激しく輝きだした。そしてその光は病室の白い壁に集められた。人影が浮かんだ、それは大間の父、智久の通夜の夜の風景だった。まだ父の死が信じられないでいる娘、百合子は棺で眠る父の亡骸から離れようとはしない。僕らはそれを見ながら気づいた、この場面を撮っているのは母親だと。いや撮っているという言い方は正しくない、これはその時、母親の目から見えていた映像そのものだ。その証拠に画面のこちら側から亡骸に手を伸ばそうとする喪服の女の手を、傍らにいた少女の大間が叩き払って言った。声は聞こえないが確かに『さわらないで、母さんなんか嫌い』そう少女の小さな口が動いた。場面が変わり画面は斎場の裏から青空に立ち上る煙を映していた。しかしそれは雨の日のガラス窓のように水の幕で覆われていった。結局、茶毘に付され骨となっても娘は母を父親から遠ざけた。どんなに謝っても娘は泣くばかり。最後に食事もとらなくなった。日に日にやせ細っていく百合子。ある日母親の態度は変わった。子供には多額と思える現金を常にテーブルの上に置き、派手な格好で男遊びをしだした。軽蔑する娘の視線を笑い飛ばし、好き放題をした。『お前にはもうかまっていられない、私は好きなようにする』といわんばかり。すると娘百合子にも変化があらわれた。男にだらしく、母親らしさのかけらもない姿にあきれ果て、幼い少女は自分一人で生きようとし始めた、それはまるで『あなたのように絶対にならない』そう言っているようにも見えた。それからの二人は憎しみ合う事で成立する親子に見えた。しかしある日、百合子が母の男を誘惑し関係を持った。前に大間に聞いた大学の医者だ。彼は糖尿病専門の教授で母親の担当医だった。男は娘百合子との過ちを恥、母親から去っていった。しかし母親は娘を叱りはしなかった。復讐だと分かっていたからだ。もしこの事で娘百合子を問いつめれば、いい気味だとばかりにマンションを出て行くに違いない。高校生になったといっても娘はまだ子供、いくら賢い子でもそうさせるわけにはいかないと思ったのだろう、母親は今の生活を変える事ができなかった。そしていくら誠実そうな優しい男性が現れても、深く理解しあおうとするまえに必ず娘が奪い去っていった。母親は度々智久の墓を訪れては何時間も泣いていた。しかし、マンションに帰り玄関のドアを開けた時、下駄箱脇にある大きな姿見に映る姿はいつもの自信に満ちたものだった。その場面を最後にカーテンは暗転した。

共に壁に向かっていた娘と父はゆっくりと向き合った。

「母さんは私の為にこんな馬鹿な事をしてたってこと？」

ブルーは大間を見つめたまま小さな口を閉じた。自分で考えなさい、私は事実をお前に見せただけ、そんな思いをブルーの瞳に感じた。

「そんなのないよ、憎んでほしくてあんなデタラメな生活してたなんて。第一お父さんはお母さんのこと許せるの？あんなに優しくしてくれたお父さんを裏切ったんだよ」

大間が持っていた本のページがパラパラとめくれた。そこには魚の腹の中から今、芽吹こうとしている種の挿絵が描かれていた。ブルーは余白に書かれているある文字に自らの光を当てた。

『もう君が僕の全てなんだ』

それを見て大間は唇を噛んだ、そして母親を振り返り悔しそうに言った。

「父さんが一番愛しているのはてっきり私だと思っていた。でもやっぱり母さんだったのね・・・」

物言わぬ母親の顔をじっと見つめる大間。

「これじゃお母さんからいくら幸せ奪っても意味なかったわけよね、私一体何してたんだろ」

母親の頬に手を当て大間は首を振った。

「私が死ねばよかったのよ・・・」

押し殺す声は後悔というより、それが自分に一番ふさわしい生き方だと聞こえた。

「やめろよ」

「怒ったっていいよ、私知ってるもの、なんで私から男が逃げていくか」

丸まった背中は今にも崩れそうに見えた。

「私は本気で誰かを愛せないのよ、だからみんな嫌になって離れていくの。当然よね、自分しか可愛くない女を好きにはなれないもの、だから一人にいるしか無かったの。あなたもそう、そのうち呆れて私の前からいなくなるの」

淡々と唇が動いた。彼女の胸の内に溜まっていた自責の膿がだらだらとこぼれ落ちるようだった。叱ろうにもうつろな目の大間は抜け殻のように力無くうなだれるばかり。それは横たわる母親以上に見るも無惨の姿。大間の身体を引き寄せた。力無いその身はぽっきりと折れそうだ。すると目の前に浮いていたブルーが大間の頬まで降りてきた。そして身体を頬にこすりつけた。

「お父さん」

ブルーの目から涙が溢れていた。それは優しく慈しむように、そして別れを惜しむように僕には見えた。大間もそれを感じたのだろう。

「私がこんなに悪い子になったから嫌いになったの？だからいっちゃんの？」

手元にあった本が又めくれた。それは自分たちの故郷の風景を語り合う場面だった。

魚の故郷、山の麓の湖の水辺に咲く色とりどりの花にお腹の中の種が寂しく呟く一行。

『君と僕の花だよ、そうだろ？』

僕はそれをみて大間がどれほど父親から深く愛されていたのが改めて知った。それは彼女も同じだろう。何とも情けない顔で大間は微笑み、そして泣いた。ブルーは大間の頬にキ

スをした。そして顔をこちらに向けゆっくりと僕らの回りを廻った。真っ黒な瞳にはくしゃくしゃ顔の娘の姿が映って見える。切ない時が流れ、そして別れの時は来た。ブルーを包む光は碧から、いつか見た時のようにオレンジ色に変わり、みるみるうちに炎のように赤く染まっていった。身体は見えないほど苦しそうにふるえだした。

大間がブルーに手を伸ばした。辛いはずなのにブルーは優しいような目で顔を振った。まるで聞き分けのない子供を諭すようだった。真紅の身体は病室の天井まで昇ると、僕ら二人を眺めた。

「お父さん、やっぱり・・・いやだよ」

小さなしっぽが可愛く振られた。『さようなら』と言っているように見えた。大間の目も僕の間も涙で一杯だった。

「ブルー」

僕はおもわず手を伸ばした、けれどブルーは指先をかすめ、愛しい人の胸に飛び込み消えた。そして次の瞬間、大間の母の身体は碧く輝き出した。波立つように、ざわめくように、光は暴れた。ブルーは最後の力を振り絞り救おうとしている。あんな姿になってまで彼は戦っている。彼の強さが凄すぎてくやしかった。大間への思いが本気なのかなんて悩む自分が惨めになった。そして思った。こんな風に大間を守りたい。

「お父さん、もうやめて」

苦しうにもがく光、もう見えないと大間は母親の身体を揺さぶった。それでも彼は戦いをやめなかった。碧い光は眩い閃光と変わり部屋中の全てを光で飲み込んだ。それは声のないブルーの最後の叫びだった。そして僕らは気を失った。

お父さんへ

お父さん、今日はとてもいい天気です。このログハウスのベランダから眺める春の海は幼き日、あなたと見たそのままです。きらきら光る波の瀬、水彩画のような淡い色合いの空、そしてその空を舞う二羽のカモメ。目に映るものどれもが体を吹き抜ける微風のように。あの日から10年、私ももう27歳、母が私を産んだ年齢と同じになりました。私は今、小さな出版社で作家と一緒に童話の絵本を作っています。正直言ってなかなか売れません。でもやりがいがあります。むかしあなたが何を思い童話を書いていたのか、そんな事を想像しながら本を作り、子供達に送り届けられる事が嬉しいのです。そんな私を母は変わったといいます。でも変わったのは母の方です。あの夏の夜の翌朝、ベットにうつふし眠っている私の頭を撫でている人がいました。母でした。母は夢を見たと言いました。

「百合子はもう大丈夫だよって、父さんが笑ってた」

その後、母はごめんねと一言いい、目を赤くしました。私は母にブルーの事は話しませんでした。少し嫉妬もありました。でも本当は話さなくても母の中に父さんがいるからいいと思ったのです。そして母は病院を退院した後、まもなく予備校を辞めました。私たちの暮らす町で小学生相手の小さな塾を始めたのです。学校の授業に取り残された子供達ばかり集めた塾です。今、母は子供達と泣き笑いの毎日です。

「百合子、雅俊さんのご両親が来られたわよ」

玄関で着慣れない着物を着た母があたふたしています。今日は彼との結納の日です。私が無理を言ってこのログハウスでお願いしました。母は渋りましたが彼は快く承知してくれました。そう言えばあの後いろんな事がありました。聞いてください、彼自分の夢を叶え医者になりました。偉いと思いませんか？でも、何よりも凄いと思ったのはこんな我が儘な女から去っていかなかった事。そんな彼を私はいつのまにか本当に好きになっていました。あの夏の日、頼りなさそうに笑った彼が今、私を笑わせてくれています。静かで深い思い、『力づく』という言葉あるけれど彼の強さは『時間づく』でした。ある意味一番強引な男性だったのかもしれませんがね。でもよく考えると父さんの思い通りになったような気がします。なんか少し悔しいです。

「娘の結婚相手は俺が決める、なんて時代おくれよ」

私は風に言葉を流しました。

「百合子、早くお出迎えして」

お父さん。いつか母になりこのベランダで彼の子供を抱きます。そうそう、むかしお父さんが彼に見せたえくぼのある綺麗な女性、それは私ではないかもしれませんが。でもいいんです。彼は私のもの、笑い皺が出来るくらい二人で幸せになるつもり。いえ、なります。

「百合子！」

「はい、今いきまーす」